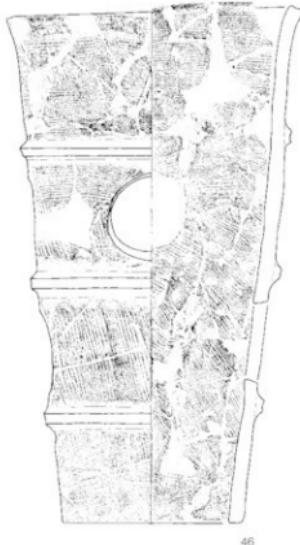


重線を角部分から施し、その中も同様の2重線を施す事を基本としているが、この復元では左右対称の模様構成とはならない。円孔は上段面上部3箇所に復元され、下部は中央に1ヶ所のみ現存する。上段帯、中央帯、下段帯はハ字状の文様で中央帯以外はその連続である。上段帯の左右に円孔がある。下段面は直線ないしは円弧で上段面同様線刻を施すが、中央部付近は破片が無く模様構成が明瞭でない。現状で左右2箇所に円孔があり、中央にも1ヶ所存在していた可能性が大きい。16～26はいずれも破片で、その内20は外郭の2重線の中を列点で埋め、他とは異なる。19・21・22～25は方形の穿孔である。17～19は上段面の上部分で、角状突起がつきいずれも別個体である。穿孔が円形と方形のものとがあり、石見型盾形埴輪は少なくとも4個体以上は存在する。27・28は人物埴輪である。27は顔の左側耳の一部以外は欠損する。服は意須比を表現している。首には粘土の貼り付けで首飾りを表現しているが1個のみ現存し他は剥落している。手は前側で合わせ剥落痕から本来はこの上に何かがついていたものと推測される。左手側の側面には円孔がある。28は頭部の半分近くが残存し鼻は欠損する。首には貼り付けによる首飾りが表現され、手は前を向く。羽根のようなものが両背中に付く。29～33は鶴形埴輪である。29は頭部に鶴冠の一部が現存し眼と耳羽を刺突により表現する。肉脛部分は剥落する。頭部には後ろから前に下がる線刻があり尾の部分にも線刻があり、中心線上にも粘土をつけて羽の一部を表現している。30は29よりは小ぶりで頭部の眼と耳羽が刺突で表現され、体部から尾にかけては線刻される。31～33は足を線刻で表現する破片で、31・32が同一個体で30に伴う、33は29に伴う可能性がある。いずれも3本ツメと後ろに生えたケヅメを表現する。34～37は馬形埴輪で34は尾で35から37は足でいずれも蹄は上部をしづら先端を外方に広げる事で表現し、後ろに逆U字形の切り込みを



第69図 3号埴出土遺物（埴輪、S=1:4）

入れる。また、この足には縦方向に切断した痕跡がある。この接合を丁寧にしていないため 37 はその間があいている。38～41 は家形埴輪である。38・39 は屋根の庇部分で 38 には外面にハケが、39 は庇の外面に斜格子文が先刻され、その上はハケが見られる。40 は外面の上部に斜格子文が線刻され、左側は剥落痕である。このため甕の一部と推測される。41 は堅魚木である。42～45 は形象埴輪の基部である。42 は外面にタテハケが見られ、斜め方向の穿孔があり、石見型盾形埴輪の基部と思われる。43 の外面はナナメ方向のナデである。44・45 は端部に突帯がめぐり、円孔が見られる。

第 68 図 46 は 3 号墳から出土した円筒埴輪である。台風の倒木により周溝部分から須恵器・甕と一緒に出土した。ほぼ完形に復元できる。口径 24.2 cm、底径 15 cm、器高 42 cm を測る。突帯は 3 条で形状は中央のへこんだ台形である。外面は口縁部と 3 段目がタテハケの後静止痕のあるヨコハケを施す。底部と 2 段目はヨコハケを省略する。底部端はヨコ方向のナデで調整する。内面はすべてヨコないしはナナメ方向のハケである。2・3 段目には円孔が対に直交する形で見られる。

(小郷)

(註 1) 河内一浩氏の名称を使用する。河内一浩 1999 「菅田白鳥埴輪窯出土の石見型盾形埴輪」『埴輪論叢第 1 号』埴輪検討会

2. 須恵器、土師器（第70～75図）

1、2は壺蓋である。1は口径17.0cmを測る大型品で、天井部の2/3程度に回転ヘラ削りが施され、口縁部との境界には浅い沈線が巡る。口縁端部はナデを施すことにより浅い凹線状になる。2は口径15.3cmを測り、天井部の1/2の範囲に回転ヘラ削りが施される。天井部と口縁部との境界には浅い凹線が巡り、口縁端部はナデを施すことにより段をなす。

3、4は壺身である。3は口径10.0cm、器高4.4cmを測る。底部の回転ヘラ削りは2/3以上の範囲に施され、口縁部の立ち上がりはわずかに内傾する。口縁端部は内傾して面をなす。前方後円墳である58号墳周辺のトレンチから出土したものである。4は口径11.4cm、器高4.0cmを測る。底部の2/3程度に回転ヘラ削りが施される。口縁部の立ち上がりは内傾し、端部はわずかに凹線がみられる。

5～9は高杯である。5は有蓋高杯の壺部で、口径12.8cmを測る。やや丸みをおびた形状で、底部には回転ヘラ削りが1/2程度の範囲に施され、その上位に波状文がみられる。口縁部は上方に立ち上がり、端部はナデによる沈線が巡る。6～9は無蓋高杯である。6は口縁端部および脚部を欠くが、脚部の3方向には長方形透孔が穿たれている。7は壺部口径14.0cmを測り、外傾して立ち上がる口縁部をもつ。壺部外面はナデにより段をなし、脚部には3方向に長方形の透孔が穿たれる。8は前方後円墳の南側に位置する円墳である59号墳付近のトレンチからの出土で、脚部には3方向に長方形の透孔がみられる。9は長脚の無蓋高杯で、上下2段3方向に長方形の透孔がみられる。壺部外面には波状文が施される。5～8に比べ新しい様相を呈する。

10は甌である。緩やかに外反しながらのびる口頭部で、段をなして逆「ハ」の字状に広がる口縁部をもつ。

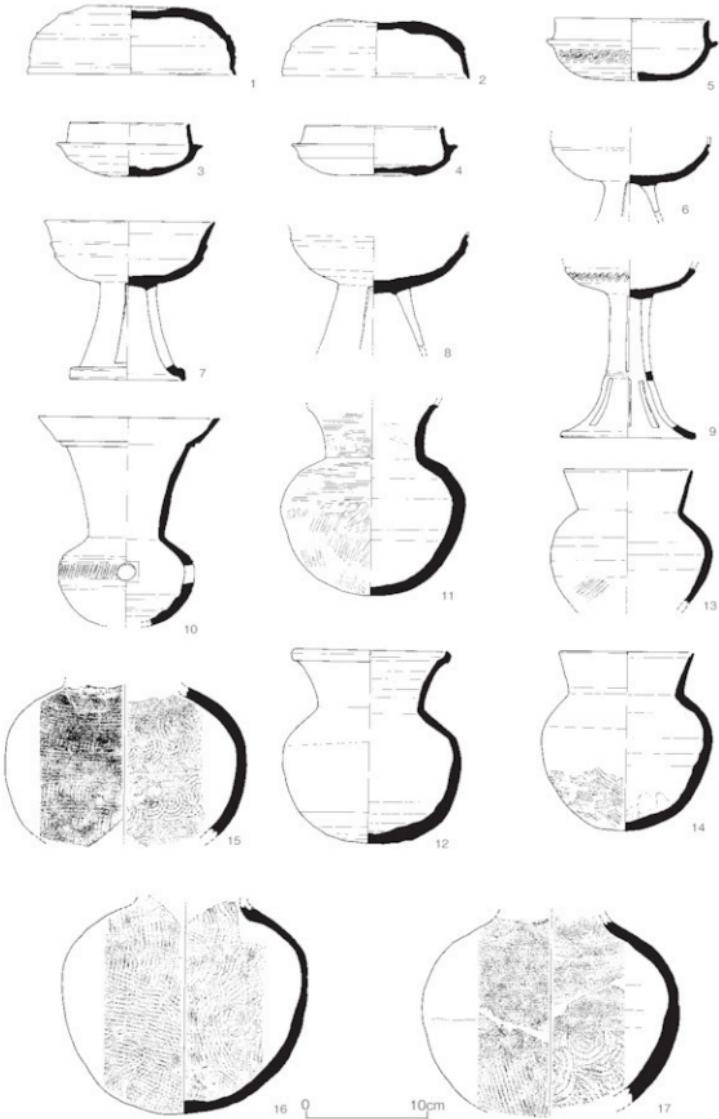
11～17は壺である。11、12は広口壺である。8同様、前方後円墳南側の59号墳付近のトレンチからの出土である。緩やかに外反する口頭部をもち、口縁端部は欠損している。球形の体部で、外面は平行タタキの後に上半部のみカキ目が施される。内面の当て具痕はナデにより消されている。12は外反する口頭部から屈曲して上方にのびる口縁部をもつ。底部には回転ヘラ削りが施される。

13、14は直口壺である。いずれも球形の体部から直線的にのびる口縁部をもち、外面は平行タタキのあと上半部のみナデ消されている。14の口縁端部は内面に1条の強いナデを施すことにより段をなし、底部内面には指頭圧痕がみられる。

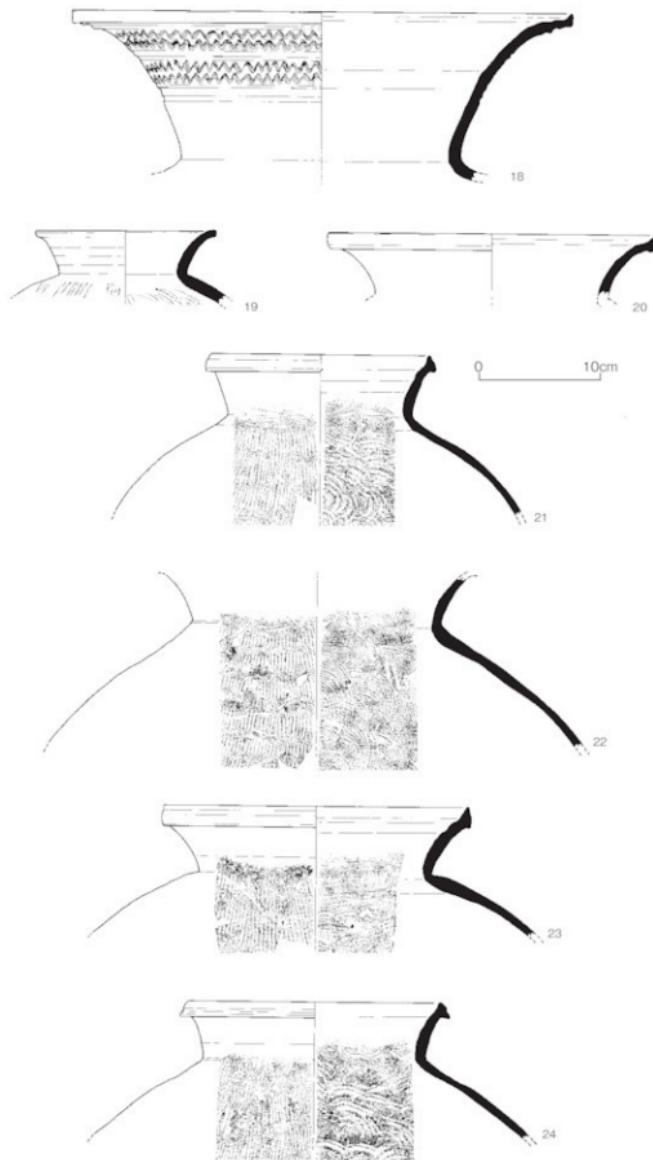
15～17は口頭部や底部を欠くが、広口壺になると思われる。球形の体部を呈し、外面に平行タタキが施される。15、17はタタキの後、上半部にカキ目が施される。

18～28は甌である。18は甌の口頭部である。大きく外反し、端部は上方に拡張する。端部の下端には強いナデによる段がつく。頭部は突線によって区切られ、波状文が2段に施される。19～24は口頭部から肩部までのもので、短く外反する口頭部をもつ。19は前方後円墳西側に位置すると推測される57号墳付近の出土で、口縁端部を丸くおさめるものである。20、21、23、24は上下に肥厚させる。胴部外面は平行タタキ、内面は同心円の当て具痕が残る。

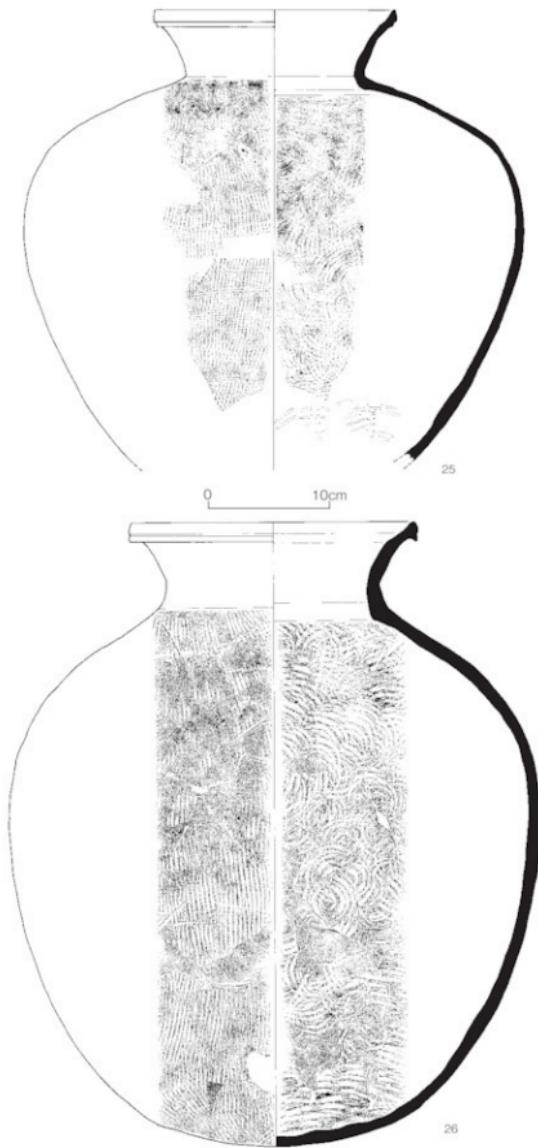
25～28はほぼ全体の形状の分かる甌である。25はやや肩のはった胴部をもち、短く外反する口頭部がつき、端部は上方に拡張する。26は球形の胴部をもち、口縁端部には沈線が1条巡る。27の口縁端部は強いナデにより段をなし、28は端部下方を外側につまみ出している。胴部外面は26は平行タタキ、その他は平行タタキで、25、27はタタキの後にカキメが施される。内面には同心円の当て具痕が残る。



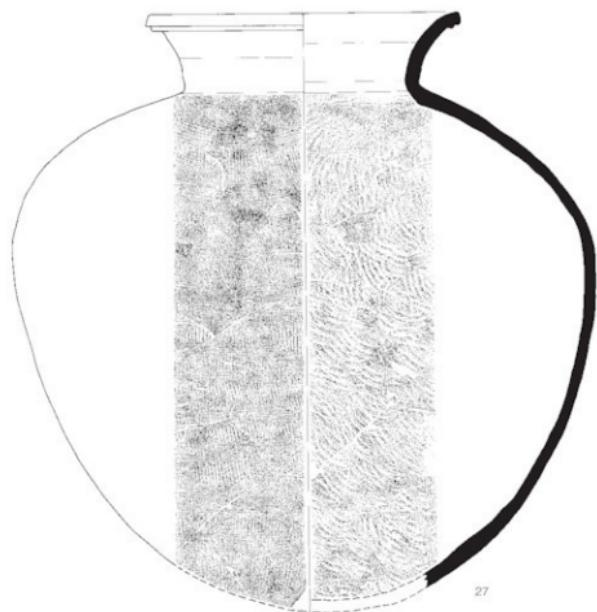
第 70 図 旧調査出土遺物 (9) (須恵器、 $S = 1 : 4$)



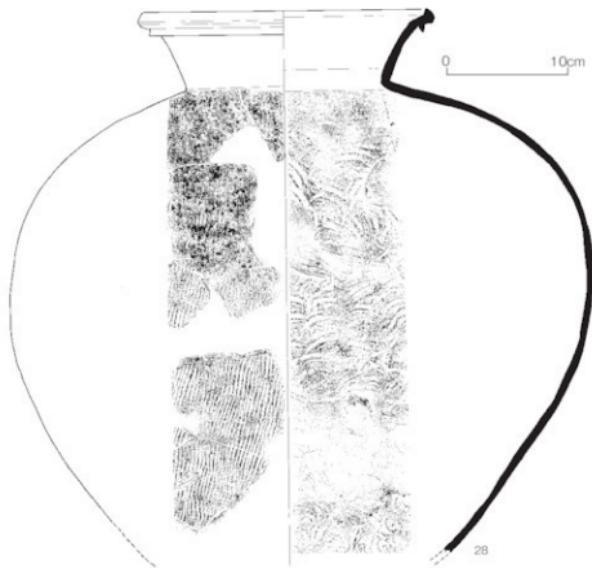
第 71 図 旧調査出土遺物 (10) (須恵器、 $S = 1 : 4$)



第72図 旧調査出土遺物(11)(須恵器、S=1:4)

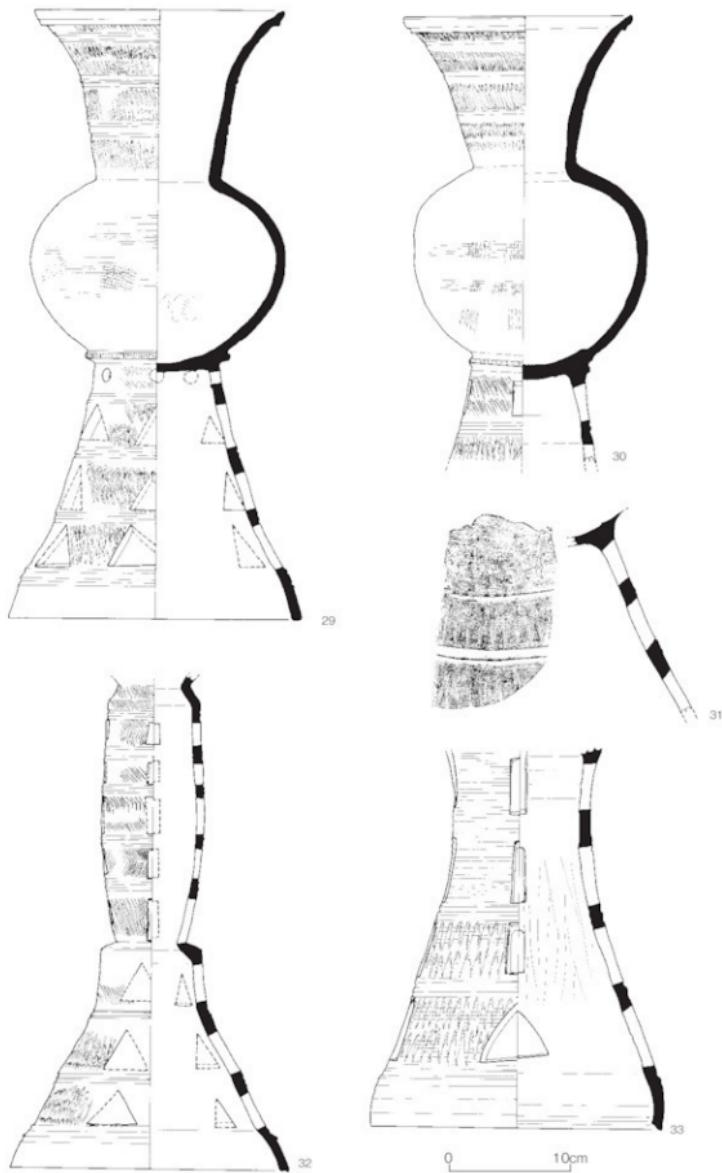


27

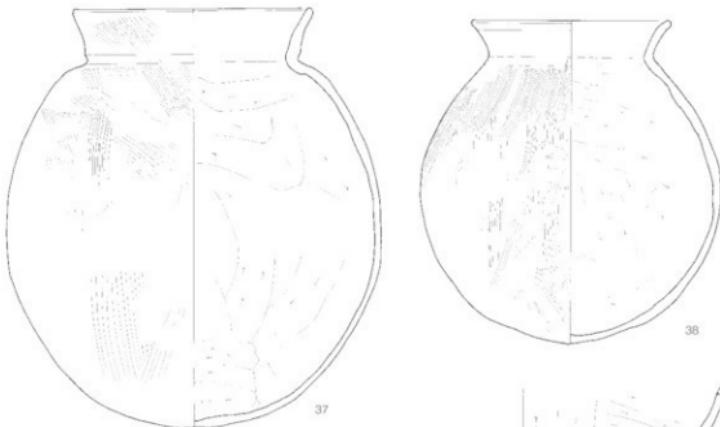
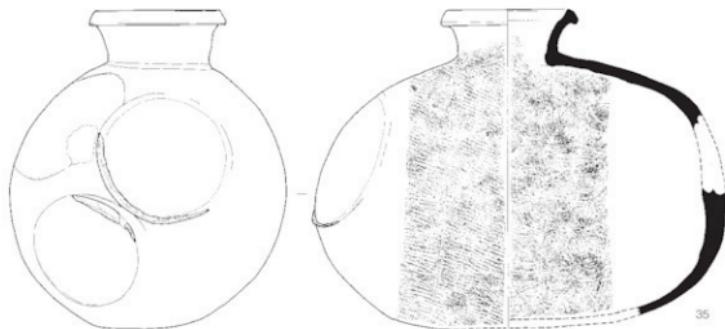
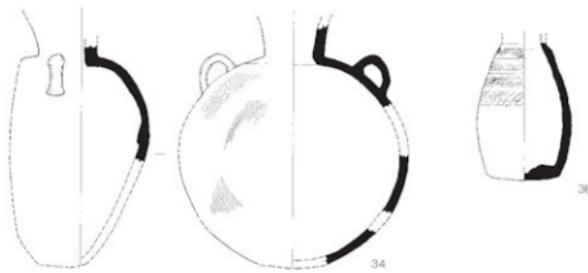


28

第 73 図 旧調査出土遺物 (12) (須恵器、 $S = 1 : 4$)



第74図 旧調査出土遺物 (13) (須恵器、S = 1 : 4)



第75図 旧調査出土遺物(14) (須恵器ほか、S=1:4)

29、30は前方後円墳である58号墳付近のトレンチから出土した台付長頭壺である。球形の体部に緩やかに外反する頭部をもち、屈曲して広がる口縁部をつける。頭部は凹線により4段に区切られ、各段に波状文や刻目文を施す。体部外面はいずれも格子目タタキの後、カキメが施される。29の脚部は凹線によって5段に区切られ、最上段には斜線文を施し、円形の透孔を8方向に、以下の3段には波状文を施した後、三角形の透孔を5方向にそれぞれ穿つ。壺との接合部分には突帯をつけ、その上面に刻目をつける。30の脚部は最上段に櫛描列点文を施した後、長方形透孔が4方向に穿たれ、2段目は波状文の後に三角形透孔が穿たれる。壺との接合部分には29同様刻目文が施される。32は筒形器台である。筒部はやや丸みをおびた形状で、凹線によって6段に区切られている。各段には櫛描列点文が施され、長方形の透孔が4方向に穿たれる。脚部は上部が直線的に下がり、下部は漏斗状に広がる。施文は凹線によって4段に区切られ、斜線文、波状文が施された後に三角形の透孔が穿たれる。欠損した最上部には小型の坏がつくと思われる。33は前方後円墳西側の57号墳から出土したとされる高環形器台の脚部と考えられ、上部2段にはカキメ、以下の2段には波状文が施される。透孔は2段目のみ三角形、それ以外は長方形である。

34は提瓶で、体部から頭部にかけて的一部分である。体部の両側には環状の耳がつく。

35は横瓶である。33同様、前方後円墳西側の57号墳から出土したとされる。横長の体部に短く外反する口頭部がつく。体部外面には平行タタキが施され、内側には同心円の当て具痕が残る。内側には体部と頭部との接合痕が明瞭に残り、外面の片側小口には、焼成時に使用された固定用の支えの痕跡が残る。

36は徳利形の壺で、口頭部を欠損している。外面には4条の凹線が施され、その間に櫛描列点文が4段に施される。底部内面に粘土の接合痕がみられる。

37～39は土師器の壺である。37、38は合口壺棺で、58号墳の北側付近で出土したとされるものである。いずれも外面にタテハケ、内面にヘラケズリが施される。39は底部のみが出土している。

(鹿島)

V. 自然科学的分析

日上歟山古墳群出土埴輪・土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白 石 純

1. 分析目的

理化学的な胎土分析により日上歟山古墳群から出土している埴輪について以下のことを検討した。

(1) 日上歟山古墳群より出土している埴輪で、古墳ごとで胎土に差異があるかどうか。

(2) 成形技法（口縁部に突帯）、外面調整（ヨコハケ、タテハケ）により胎土に差異がみられるか。

また、同古墳群が立地する丘陵上には、住居跡や建物跡も確認されている。この分析では、この住居跡から出土している弥生時代後期から古墳時代前期の土器には、岡山県南部で出土する吉備型甕が出土している。そこで、この吉備型甕の胎土が岡山県南部で出土する吉備型甕と胎土的に類似しているかどうかを検討した。

2. 分析方法および試料

理化学的な分析方法は、蛍光X線分析法で実施した。この方法は、試料に含まれる成分（元素）量を測定するもので、その成分量の違いから胎土の類似差を推定する方法である。また、分析装置の特徴は、分析試料の作製が簡単で、測定も短時間のため、多量に試料を分析するのに有効である。しかし、測定試料は均質性が求められることから、分析試料を2 gほど粉末にする必要があり、一部破壊分析である。

測定装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ社製 SEA2010L）を使用し、 SiO_2 ・ TiO_2 ・ Al_2O_3 ・ Fe_2O_3 ・ MnO ・ MgO ・ CaO ・ Na_2O ・ K_2O ・ P_2O_5 ・ Rb ・ Sr ・ Zr の13元素を測定した。表1の出土試料分析値一覧表から TiO_2 （タン）、 Fe_2O_3 （鉄）、 CaO （カシウム）、 K_2O （カリウム）の各元素に顕著な違いがみられる。そこで、これらの元素のXY散布図を作成し、胎土の比較を行った。

分析に供した試料は、表1に示した埴輪38点と弥生後期から古墳前期土器10点の合計48点である。また、土器に関しては岡山県南部の吉備型甕と比較した。

3. 分析結果

第1図 K_2O - CaO 、第2図 TiO_2 - Fe_2O_3 散布図では、各古墳別出土の埴輪の胎土を比較した。その結果、古墳ごとにまとまる傾向にある。第1図では、58号、59号、60号がそれぞれ識別でき、67号、69号がそれぞれまとまるが重複している。第2図では、58号と60号と59号、67号、68号、69号の3つの胎土にわかれる。

第3図 K_2O - CaO 、第4図 TiO_2 - Fe_2O_3 散布図では、成形技法（口縁部に突帯）、外面調整（ヨコハケかタテハケ）により胎土に差異がみられるかどうか調べた。その結果、ヨコハケで口縁部に突帯があるものは胎土的にまとまり、外面がヨコハケのみの埴輪と胎土的に差はみられなかった。また、外面がヨコハケとタテハケで胎土に違いがあるかどうかでは、調整の違いで胎土に差はなかった。

第5図 K_2O - CaO 、第6図 TiO_2 - CaO 散布図では、住居跡出土の弥生時代後期から古墳時代前期の土

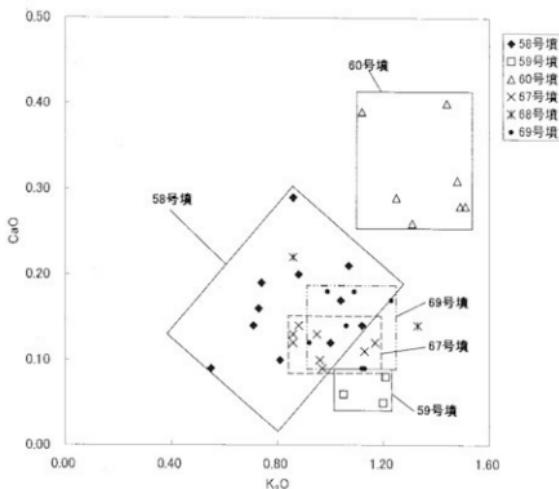
器のなかに吉備型甕が出土しており、この土器と吉備南部地域遺跡出土の吉備型甕と比較した。その結果、日上戸山古墳群出土の吉備型甕およびその他の土器は胎土的に差はなくほぼ一つにまとまり、また吉備南部地域の吉備型甕と胎土は異なっていた。

4.まとめ

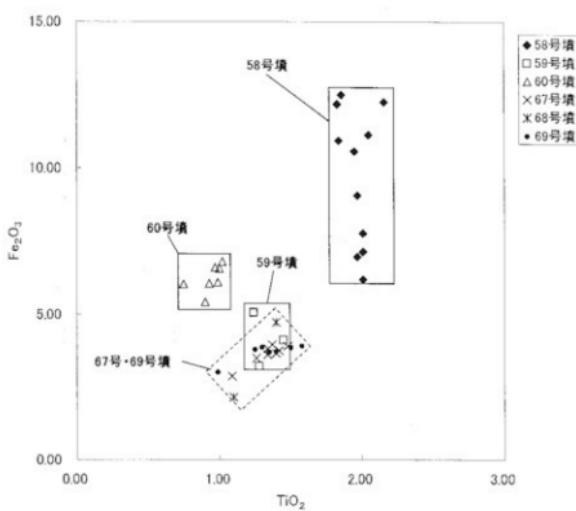
日上戸山古墳群出土の埴輪、土器の胎土分析を実施したところ、以下のことが明らかになった。

- (1) 墓輪の分析では、古墳ごとにまとまる傾向がみられた。特に58号墳（前方後円墳）と60号墳出土の埴輪は他のものに比べ、胎土が異なり識別できた。また、58号墳の埴輪は、色調が赤色を呈しており、胎土にも Fe_2O_3 （鉄）および TiO_2 （チタン）が多く含まれていた。これは埴輪製作者が意識して赤色に焼成しようしたものと推定される。
- (2) 59号墳、67号墳、69号墳の埴輪はほぼ一つにまとまり、胎土に違いはみられなかった。この67号墳、69号墳出土の外面ヨコハケで口縁部に突帯を有する埴輪（22・26・35）は、他の埴輪と胎土が同じで、36（外面ヨコハケで口縁部に突帯）も22、26、35と胎土が類似しており外面調整（ヨコハケかタテハケか）に関係なく胎土に差はみられなかった。このように日上戸山古墳群出土埴輪の分析では、成形や調整技法よりも、古墳ごとに埴輪の胎土が異なることが推定される。
- (3) 住居跡出土の弥生時代後期から古墳時代前期の土器のうち、形態、技法的な分類で吉備型と考えられる甕は、胎土的に吉備南部（足守川や旭川下流域）の吉備型甕とは胎土が異なっていた。この結果から在地で生産されたと推定されるが、吉備南部のその他の遺跡出土吉備型甕（たとえば吉井川下流域出土土器など）と比較していないため、在地で生産されたと推定できず、今後の課題としたい。

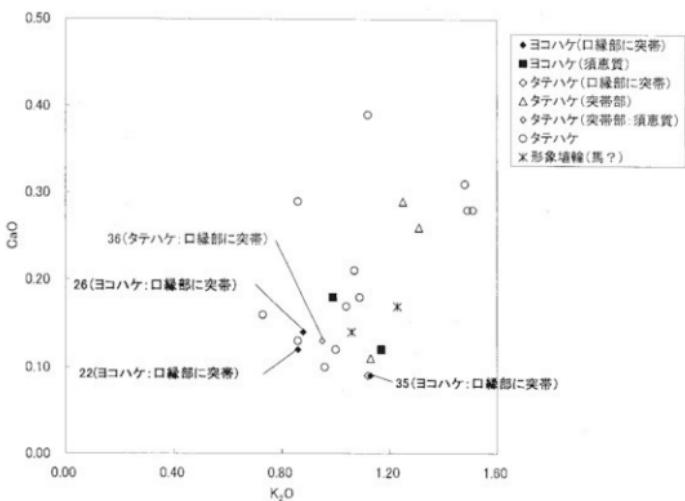
この分析の機会を与えていただいた小郷利幸氏には、いろいろご教示いただいた。末筆ではあります
が、記して感謝いたします。



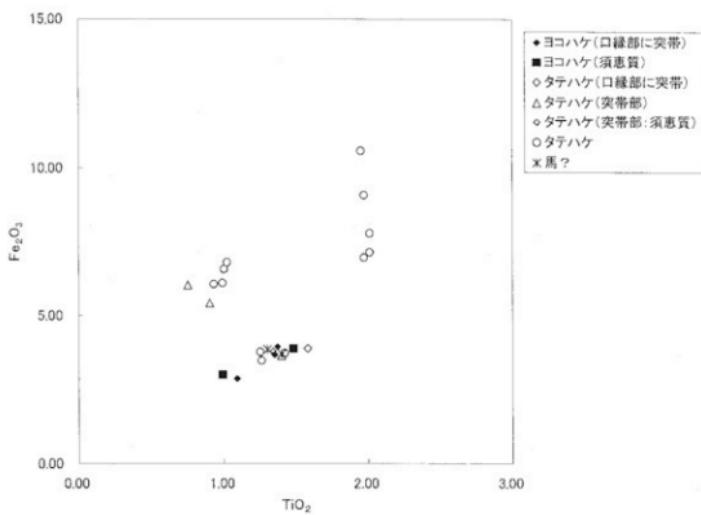
第1図 塗輪の古墳別胎土の比較 (K₂O-CaO 散布図)



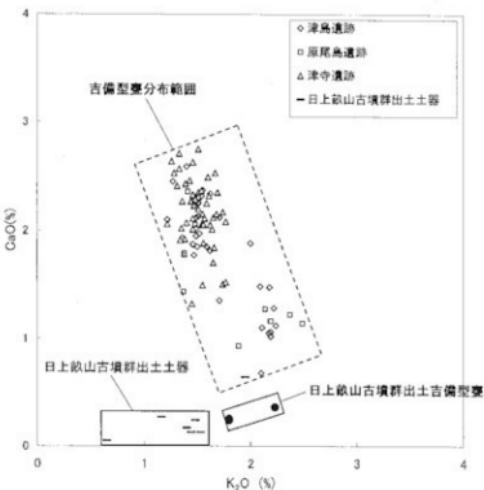
第2図 塗輪の古墳別胎土の比較 (Fe₂O₃-TiO₂ 散布図)



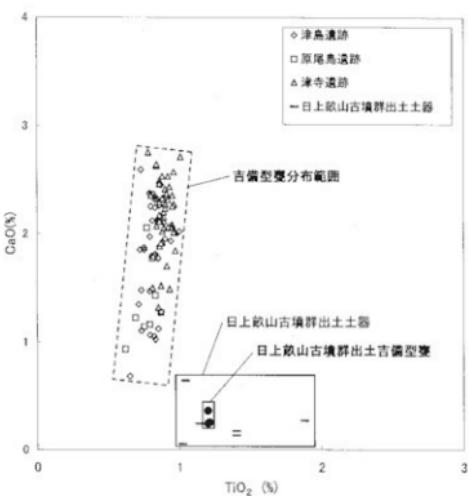
第3図 塗輪の成形・調整別による胎土の比較 (K₂O-CaO 散布図)



第4図 塗輪の成形・調整別による胎土の比較 (Fe₂O₃-TiO₂ 散布図)



第5図 日上歛山古墳群出土土器と吉備型壺の胎土比較 (K_2O - CaO 散布図)



第6図 日上歛山古墳群出土土器と吉備型壺の胎土比較 (TiO_2 - CaO 散布図)

No.	出土地点	古地名	岩相名	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO _t	MnO	K ₂ O	Na ₂ O	P ₂ O ₅	Rb	Sr	Zr	調整	備考				
1	H-1.4 T-3周真	5.8% 填隙 砂岩	円盤	63.32	1.83	20.01	12.18	0.14	1.51	0.54	0.01	0.03	144	80	412	不明	前方透視図			
2	H-1.4 T-3周真	5.8% 填隙 砂岩	円盤	62.25	1.83	22.45	2.25	0.18	1.92	0.14	2.39	0.71	0.00	1.34	76	391	不明	前方透視図		
3	H-1.4 T-6周真	5.8% 填隙 砂岩	円盤	63.70	2.01	21.18	7.14	0.09	1.67	0.12	2.76	1.00	0.03	1.63	65	406	不明	前方透視図		
4	H-1.4 T-6周真	5.8% 填隙 砂岩	円盤	63.13	2.01	20.77	7.75	0.10	1.83	0.17	2.81	1.04	0.00	1.90	53	417	外輪ガラス	前方透視図		
5	H-1.4 T-6周真	5.8% 填隙 砂岩	円盤	64.51	1.95	18.55	10.57	0.17	1.67	0.16	1.98	0.73	0.04	1.32	57	382	外輪ガラス	前方透視図		
6	H-1.4 T-1周真	5.8% 填隙 砂岩	円盤	62.38	1.84	18.90	10.94	0.15	1.88	0.20	2.59	0.88	0.00	171	59	400	不明	前方透視図		
7	H-1.4 T-1周真	5.8% 填隙 砂岩	円盤	60.25	2.05	20.23	11.13	0.15	1.60	0.09	3.54	0.55	0.00	110	42	415	不明	前方透視図		
9	H-1.4 T-1周真	5.8% 填隙 砂岩	円盤	59.83	2.01	22.47	6.19	0.08	2.50	0.14	6.44	1.12	0.00	156	60	399	不明	前方透視図		
10	H-1.4 T-1周真	5.8% 填隙 砂岩	円盤	64.49	1.77	19.19	9.07	0.11	1.62	0.29	1.96	0.86	0.02	147	56	447	外輪ガラス	前方透視図		
11	H-1.4 T-1周真	5.8% 填隙 砂岩	円盤	65.06	2.4	18.16	5.66	0.05	2.42	0.06	6.75	1.05	0.00	176	66	365	外輪ガラス	前方透視図		
12	H-1.5 T-1周真	5.9% 填隙 砂岩	円盤	64.47	0.90	18.75	5.42	0.06	2.33	0.29	6.38	1.25	0.00	163	121	351	外輪ガラス	前方透視図		
14	H-1.5 T-2周真	6.0% 填隙 砂岩	円盤	62.39	1.84	18.41	6.57	0.13	1.70	0.21	5.26	1.12	0.05	142	148	402	外輪ガラス	前方透視図		
16	H-1.5 T-2周真	6.0% 填隙 砂岩	円盤	68.69	1.02	18.12	6.80	0.02	1.12	0.05	1.56	0.31	1.59	1.48	0.01	211	132	431	外輪ガラス	前方透視図
17	H-1.5 T-2周真	6.0% 填隙 砂岩	円盤	66.45	1.29	20.50	3.21	0.05	2.36	0.09	4.95	1.21	0.00	178	95	376	外輪ガラス	前方透視図		
19	H-1.5 T-4周真	6.0% 填隙 砂岩	円盤	68.03	0.93	13.55	6.06	0.06	1.69	0.23	2.54	1.49	0.07	166	48	525	外輪ガラス	前方透視図		
21	H-1.5 T-4周真	6.0% 填隙 砂岩	円盤	68.66	0.97	19.06	6.60	0.08	1.37	0.28	1.66	1.51	0.00	192	130	401	外輪ガラス	前方透視図		
22	H-1.5 T-5周真	6.0% 填隙 砂岩	円盤	64.53	1.34	20.31	3.81	0.06	1.60	0.13	2.12	0.94	0.06	121	55	416	外輪ガラス	前方透視図		
23	H-1.5 T-7周真	6.7% 填隙 砂岩	円盤	67.68	1.34	22.97	3.48	0.04	2.49	0.10	6.21	0.96	0.00	152	64	532	外輪ガラス	前方透視図		
24	H-1.5 T-7周真	6.7% 填隙 砂岩	円盤	62.27	1.26	22.61	3.65	0.03	2.70	0.22	7.17	0.86	0.00	152	59	426	外輪ガラス	前方透視図		
25	H-1.5 T-7周真	6.7% 填隙 砂岩	円盤	66.76	1.40	22.61	3.65	0.05	1.62	0.11	2.45	1.13	0.00	217	74	516	外輪ガラス	前方透視図		
26	H-1.5 T-7周真	6.7% 填隙 砂岩	円盤	63.96	0.37	25.14	3.95	0.04	1.62	0.14	2.69	0.98	0.00	120	60	554	外輪ガラス	前方透視図		
28	H-1.5 T-7周真	6.7% 填隙 砂岩	円盤	59.39	0.34	25.72	3.60	0.04	2.44	0.09	6.23	0.97	0.00	112	63	450	外輪ガラス	前方透視図		
29	H-1.5 T-1周真	6.7% 填隙 砂岩	円盤	67.14	1.40	22.74	3.90	0.05	1.56	0.10	1.68	1.17	0.00	190	121	532	外輪ガラス	前方透視図		
30	H-1.5 T-1周真	6.8% 填隙 砂岩	円盤	67.90	1.40	20.49	4.73	0.04	1.98	0.13	4.55	0.96	0.00	141	41	510	外輪ガラス	前方透視図		
31	H-1.5 T-1周真	6.8% 填隙 砂岩	円盤	69.91	1.10	18.73	2.14	0.03	2.70	0.22	7.17	0.86	0.00	96	76	441	外輪ガラス	前方透視図		
32	H-1.5 T-7周真	6.9% 填隙 砂岩	円盤	67.57	1.25	21.90	3.78	0.05	1.71	0.16	2.85	1.09	0.02	142	40	408	外輪ガラス	前方透視図		
33	H-1.7 T-7周真	6.9% 填隙 砂岩	円盤	65.20	0.59	25.05	0.04	0.25	0.16	1.37	0.99	0.00	132	59	400	外輪ガラス	前方透視図			
34	H-1.7 T-7周真	6.9% 填隙 砂岩	円盤	67.14	1.40	22.30	3.68	0.04	1.66	0.09	2.29	1.12	0.00	200	58	525	外輪ガラス	前方透視図		
36	H-1.7 T-7周真	6.9% 填隙 砂岩	円盤	68.47	1.58	21.90	3.90	0.04	1.44	0.09	2.24	1.12	0.00	208	71	537	外輪ガラス	前方透視図		
37	H-1.7 T-7周真	6.9% 填隙 砂岩	円盤	69.08	1.40	22.05	3.70	0.05	1.40	0.17	0.78	1.23	0.00	183	66	521	外輪ガラス	前方透視図		
39	H-1.7 T-7周真	6.9% 填隙 砂岩	円盤	63.52	1.30	21.63	3.86	0.03	2.39	0.14	5.84	1.06	0.00	173	72	405	外輪ガラス	前方透視図		
40	H-1.7 T-7周真	6.9% 填隙 砂岩	円盤	65.29	1.50	24.08	3.85	0.04	1.70	0.12	2.34	0.92	0.00	117	53	556	外輪ガラス	前方透視図		
41	H-1.7 T-7周真	6.9% 填隙 砂岩	円盤	65.93	1.14	17.46	4.66	0.10	1.56	0.24	3.00	1.34	0.00	184	122	439	外輪ガラス	前方透視図		
42	H-1.7 T-7周真	6.9% 填隙 砂岩	円盤	66.37	1.20	20.36	4.64	0.06	1.60	0.24	2.46	1.80	0.00	260	84	582	外輪ガラス	前方透視図		
43	H-1.7 T-7周真	6.9% 填隙 砂岩	円盤	66.91	1.21	19.46	4.52	0.05	1.78	0.25	3.88	1.00	0.00	158	74	526	外輪ガラス	前方透視図		
44	H-16T-3	S-2	砂岩	65.41	1.40	21.20	5.23	0.06	1.56	0.13	2.39	2.23	0.04	256	148	516	外輪ガラス	前方透視図		
45	H-16T-3	S-2	砂岩	60.57	1.04	20.87	5.11	0.15	1.41	0.14	2.11	1.71	0.02	160	55	551	外輪ガラス	前方透視図		
47	H-16T-3	S-2	砂岩	65.54	1.40	21.43	6.26	0.08	1.49	0.13	1.77	1.53	0.20	146	59	685	外輪ガラス	前方透視図		

表 1 日上歴山古墳群出土埴輪等分析一覧表(単位: SiO₂ ~ P₂O₅ (%), Rb ~ Zr (ppm))

VI. 考 察

1. 日上畠山古墳群について

(1) 群構成と時期について

今回の調査で確認された墳丘の存在しない古墳は東側丘陵で10基、西側丘陵で1基である。その中には前方後円墳1基が含まれ、その他は円・方墳で、円墳がほとんどを占める。ほとんどの古墳が周溝のみ残存する。この周溝内から埴輪や須恵器などの遺物が出土している。なお、今回調査した古墳およびすでに調査され概要が判明している古墳の詳細は一覧表（第2表）を参照していただきたい。以下古墳群の構成と時期について述べる。

（東側丘陵、第76図）東側丘陵では場所の特定できた古墳の総数は66基であり、その内古墳の時期が判明しているものは前回の調査分も含めて10基ほどである。それらを参考に本古墳群の時期別の構成を推測する。まず、最初に造られたのは北端にある1号墳である。この古墳は方墳で埋葬施設はT字形に配置されており、埋葬施設の種類は異なるが、これは前方後円墳である日上天王山古墳の配置と同一である。このことから少なくとも天王山古墳との系譜がおえるものと推測され、時期は4世紀後半頃である。次に須恵器を伴わない5世紀代のものは方墳の14号墳があり、その他の同時期のものは確認できていないが墳丘の特徴などから可能性があるものもある。いずれにせよ1号墳と天王山古墳の中間辺りに築造される。その他の円墳はほとんどが須恵器を伴う5世紀末から6世紀前半であると推測されるが、調査された古墳が限られているため築造順の詳細は定かではない。ちなみに1号墳に近い2・3号墳の内3号墳で須恵器、埴輪（第69図）が出土している事から、これらは5世紀末から6世紀初頭頃で、1号墳に続いて築造されたものではない。墳丘の存在しない68号墳も同様の埴輪が出土する事からほぼ同時期である。また、墳丘の存在しない前方後円墳（58号墳）は須恵器や埴輪の特徴から6世紀前半頃である。この前方後円墳は全長32m、くびれ部の幅が広く、周溝が盾形にややいびつな形である。埋葬施設は堅穴式石槨と推測される。T2-13では周溝底付近でその石材らしきものが集積していた。

古墳名	墳形・規模 (m)	蓋石	埴輪				副器品	其他	埋葬施設	時 期	備 考
			円筒	圓形	直筒	其他					
1号墳	方墳 (20.4)	×	×	×	×	×	鉄鋸他		堅穴式石槨 箱式石棺	4世紀後半	平成9年度調査
6号墳	円墳 (15.2)	○	A	?	○	○	鉄鋸他		堅穴式石槨 木棺直葬	TK47	平成9年度調査
1・4号墳	方墳 (16.6)	×	×	×	×	×	鉄鋸	粘土炉	堅穴式石槨 木棺直葬	5世紀前半	平成9年度調査
3・5号墳	円墳 (9.4)	×	×	×	○	○	鉄鋸他	木棺直葬2	TK47～MT15	平成8年度調査	
5・8号墳	前方後円墳 (32)	○	A・B	箇・人物 他	○	○	鍍・玉他	堅穴式石槨	MT15～TK10	T2-3～14、3-6-9-10、 田51号墳	
5・9号墳	円墳 (9.7)	○	A	人物・馬	○	○		削平	～TK10	T3-1-4-6、田52号墳	
6・0号墳	円墳 (12)	?	C	鹿	○	○	土師器	木棺直葬 削平	TK10	T3-2～5、田53号墳	
6・2号墳	円墳 (15)	?	?	?	○	○	鉄鋸	木棺直葬?	6世紀前半	T4-8	
6・3号墳	円墳?	○	?	?	?	?			不明	T4-9-10	
6・4号墳	方墳 (10以下)	○	×	×	?	?		削平	不明	T1-2-3	
6・5号墳	円墳 (18)	○	×	×	○	○		削平	MT15～TK10	T1-7、2-2	
6・6号墳	円墳 (8.6)	×	×	×	?	?		削平	不明	T3-13	
6・7号墳	円墳?	○	A	?	○	○		削平	TK47～MT15	T3-7-11	
6・8号墳	円墳 (8)	○	A	人物・家	○	○	木棺直葬	削平	TK47	T3-12-14、5-2	
6・9号墳	円墳?	○	A	馬・人物	○	○		削平	～MT15	T5-7	
7・0号墳	円墳 (6.7)	×	×	×	?	?		削平	不明	T5-4-5	
7・1号墳	円墳 (17.5)	?	×	×	○	○			不明	T4-5-7	
7・2号墳	円墳?	?	×	×	?	?	鉄刀	削平	不明	T4-2	

第2表 調査古墳一覧表



第76図 日上歟山古墳群(東丘陵) 全体図 (S = 1 : 1500)

おそらく明治の開墾時に廃棄されたものであろう。今回の調査での出土遺物には埴輪、須恵器があり、埴輪は円筒埴輪、形象埴輪がある。また、旧調査で鏡、装身具（こはく製勾玉1、小玉約10）、鉄鎌、馬具（鋲具、鉄地金鉗貼F字形鏡板）などの出土が記載されているが、一部しか現存しない。また、明治6年に造られた「古家」に記されている古墳はこの58号墳と思われる。なお美作地方の同時期の前方後円墳は、美作市錦青塚古墳（全長33m、註1）、津山市玉琳大塚古墳（全長30～35m、註2）があり、前者は周溝を持たないが前方部が後円部に比べ短い形態で、58号墳に良く似ている。これらはいずれも30mクラスの前方後円墳で、美作では最大規模である。

また、58号墳の南にある59号墳はやや先行するかほぼ同時期で、60号墳は58号墳より後出で一番新しい古墳である。また、埴輪や須恵器が多量に出土した67と69号墳は近接しているため、両者がそれぞれ円墳の場合と、同一で前方後円墳になる可能性もある。いずれにせよ、58号墳周辺の円墳は埴輪（円筒・形象）をもつものが多い。66号墳、70号墳は出土遺物が無く、時期は不明である。日上天王山古墳の南側で検出された64号墳は、周溝のみで方墳のようである。鶴山古墳群とはやや離れているため、天王山古墳との関連が考えられる。葺石らしき石も見られ、出土遺物は無いが、主軸が天王山古墳と同一線上にあり、方墳である事から陪塚の可能性がある。天王山古墳の境外では箱式石棺2基が存在し、排水溝により一部が削られている。今回調査をおこない、構造や法量が判明した。石材は、地元の凝灰岩を使用しているものがある。これら箱式石棺が境外の周囲にある事から、さらに複数の箱式石棺などが存在する可能性はある。

（西側丘陵、第42図）西側丘陵では、墳丘の存在するもの4基、存在しないもの1基、計5基を確認した。このうち時期がほぼ判明しているのは62号墳で須恵器が出土する。また墳丘の無い72号墳は周辺の畑で須恵器が採集され、残丘の残る71号墳も同様に須恵器を採集した。このためこれら古墳は6世紀前半墳と推測される。72号墳の周辺では3基の古墳が存在していた言い伝えがあるが、今回確認できたのは1基である。調査範囲が限定されていた事もあるが、周辺が土取りされていて周溝がすでに存在しない可能性もある。63号墳はやや離れ単独の觀がある。以前お稲荷さんが祭られていて地元では「狐塚」と呼ばれている。確認調査でも周溝は一切見られず（すでに削平か）、須恵器などの出土遺物も見られない。墳丘も周囲がかなり削られており、その断面に葺石が見られる事から、時期は中期前半墳の可能性が考えられる。

（小郷）

（2）出土遺物について

a. 須恵器について

今回出土の須恵器は周溝出土がほとんどであり、壺が比較的多い。また、埋葬施設も2基検出され、壺なども出土している。その他の器種としては、高壺、提瓶、器台などがある。この中で古いのは58号墳の壺（第23図7）、67号墳の壺（第40図17）、68号墳の壺（第58図4・5）で陶邑編年のTK47型式壺である。また、新しいのは、58号墳の高環形器台（第24図16）や60号墳出土の壺（第38図3・4）でTK10型式壺である。また、旧調査の須恵器もほぼこの時期幅の中におさまるが、長脚2段の無蓋高壺（第70図9）や横瓶（第75図35）はやや後出のようである。特に横瓶は横穴式石室墳からの出土の可能性があり、周辺に同様な古墳が存在していた可能性もある。また、T5-7出土の第59図16は、外面に刺突の装飾があり、全体像は不明だが皮袋形壺の可能性がある。第75図36は平底の壺で徳利の形をしている。良く似たものは、津山市コウデン2号墳（円墳155m、横穴式石室、註3）

から出土している。

(小郷)

b. 埴輪について

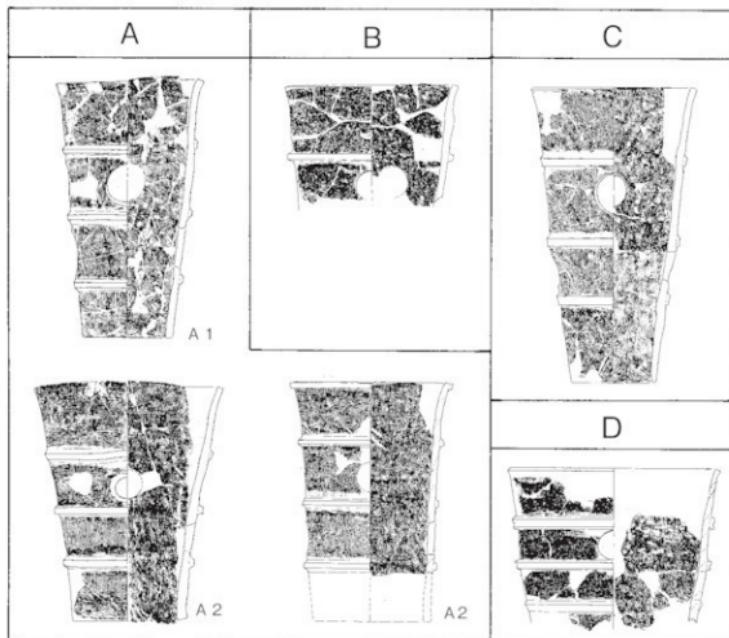
埴輪には円筒、朝顔、形象埴輪がある。

(円筒埴輪)

全容のわかるものが、60号墳や旧調査などで出土した。それによると突帯はほとんどが3条のようである。これらを外面の調整や器高等で4種類に分類（A～D類）した（第77図）。

(A類)

口径24～31cm、底径15～19cm、器高38～42cmで外面調整が1次調整のタテハケの上に一部にハケの静止痕の見られるB種ヨコハケ（註4）も見られ、この場合も一回で施しているいわゆるBc種（註5）で、他はC種ヨコハケである。ハケは1cmあたり4～7本のものと10～11本のものとがある。これらヨコハケを口縁部と3段目に施し、底部と2段目は省略してタテハケのみである。また、底部外面は横方向のナデによる底部調整が見られる。このA類の中にはB種ヨコハケを施しやや器高が高く細身で、内面にもヨコハケを施すものが、3号墳や6号墳などで出土している。よってこのA類は細分され、内面にヨコハケの見られるものをA1類、見られないものをA2類とする。またA2類には口縁部に突帯がめぐるものもあり、この両者に波状文のヘラ記号がある。



第77図 円筒埴輪分類図

(C類)

全形のわかるものはないが、口径 28.5 cm ぐらいで 2 次調整のヨコハケを一切省略したタテハケだけのものである。破片から推測してプロポーションは A 2 類に似ており、外面に施すタテハケが 7 ~ 11 本と比較的細かいのが特徴である。

(C類)

口径 27.5 ~ 31 cm、底径 14 cm、器高 48 cm、A 類に比べて器高が高く、外面は B 類同様タテハケであるが、左上りの斜め方向のタテハケを底部以外に施している。タテハケは 7 ~ 9 本で、突帯間は 2 段目が 3 段目より極端に短いプロポーションのものもある。突帯は A・B 類に比べ扁平で、設置時に上下部分をかなり押さえている。

(D類)

口径が 34 cm と大きく、3 条突帯であれば器高の低いものである。突帯間が短く突帯の形状も M 字形および三角形である。外面はヨコハケであるが、ハケの単位が確認できず板状の工具のようである。今回の調査では出土しておらず、確認できるのは旧調査の 1 点のみである。

ほとんどのものが、上記の A ~ C の 3 种類のようである。A 2 類が出土したのは、59・67・69 号墳の円墳で、前方後円墳である 58 号墳は一部 A 2 類が見られるが、ほとんどが B 類である。A 1 類は 68 号墳で見られ、3 号墳や 6 号墳にもある事から丘陵尾根線上の古墳に使用されている。A 2 類は丘陵の西側斜面に多く見られ、C 類は 60 号墳の円墳で出土していて、同様に西側斜面である。

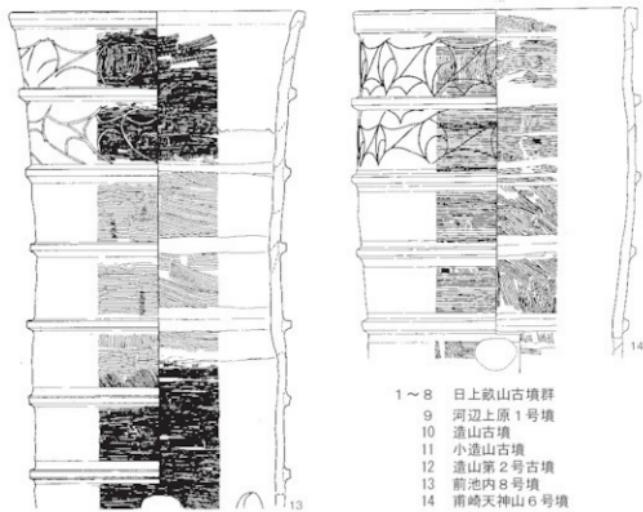
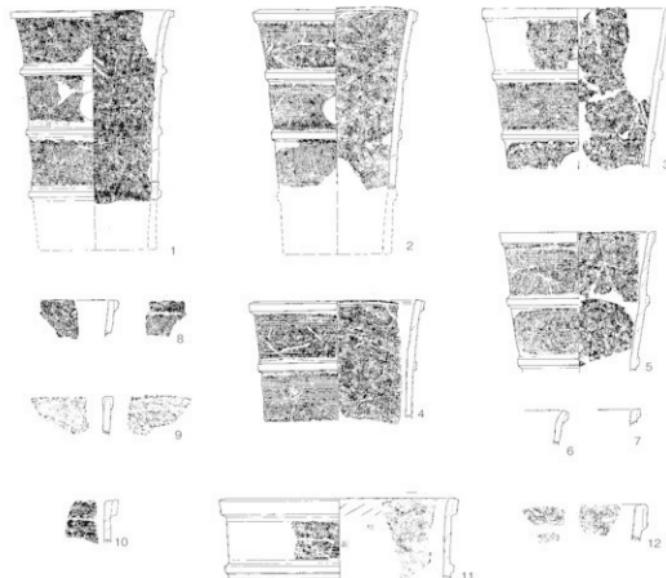
A 類の埴輪は須恵器の TK 47 型式、B 類は MT 15 型式 ~ TK 10 型式、C 類は TK 10 型式の須恵器と概ね共伴する事から A から C 類の順に概ね変遷する。なおヘラ記号はいずれも A 2 類で見られ波状文と「<」がある。尚、埴輪の胎土分析では古墳（A ~ C の分類）ごとにまとまりがあり、特に B 類は意識して赤色に焼成している可能性がある（第 V 章参照）。

(口縁部に突帯をもつ円筒埴輪)

A 2 類などのうち口縁部にも突帯をめぐらすものが 67・69 号墳など（第 78 図 1 ~ 8）から出土した。この突帯も幅 1 ~ 2.3 cm、高さ 0.3 ~ 0.8 cm と幅があり、幅 2 cm 前後が多い。突帯高を突帯幅で割った突帯の突出度は、0.13 ~ 0.6 と幅があり、特に幅 1 cm のもの（同 1）は突帯の突出度は最大の 0.6 で、その他は 0.4（同 7・8）、0.2（同 2 ~ 6）前後のものである。ちなみに、突帯幅が広くなるほど扁平となるようである。

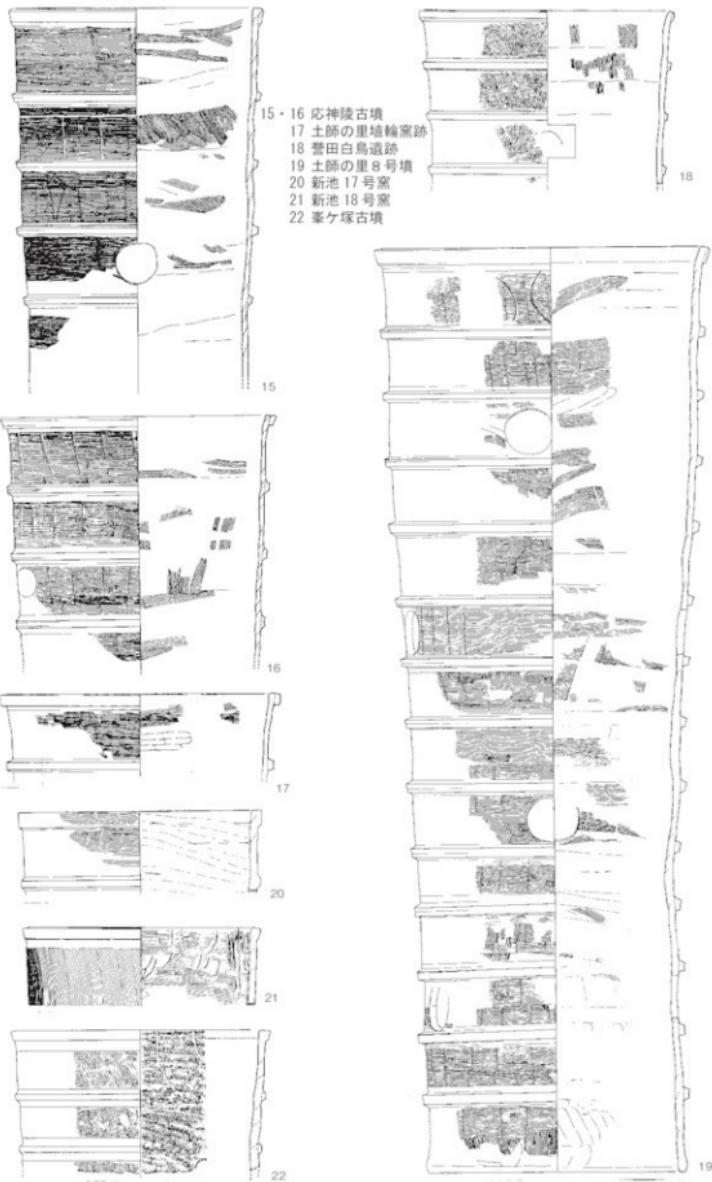
このような口縁部に突帯を施す類例は、大阪府羽曳野市応神陵古墳（第 79 図 15・16、註 6）、豊田白鳥遺跡（同 18、註 7）、藤井寺市市野山古墳（註 8）、土師の里埴輪窯跡（同 17、註 9）など古市古墳群周辺に多く見られ畿内地域の特徴とされる。特に応神陵古墳ではほとんどがこの突帯をもつ。応神陵古墳の分析では、突帯幅は 2.45 ~ 4.8 cm、高さ 0.6 ~ 1.1 cm、突出度は 0.18 ~ 0.33（註 10）で、本例と比べると、埴輪自体が大形品のためかなり大きめの突帯のようで、その中でも突出度が 0.6 のものは見られない。また、畿内の類例を時期的に見れば、II 期 ~ V 期の古墳に見られ、特に IV 期からは前方後円墳である大形の古墳以外に円墳や方墳でも見られるようになる（註 11）が、そのほとんどは前方後円墳に付随する古墳である。一番新しいものは羽曳野市の峯ヶ塚古墳（同 22、註 12）や新池 17・18 号窯（同 20・21、註 13）の V 期であるがその数は少ない。

畿内地方以外の西日本では、岡山県と宮崎県内（註 14）に見られ、岡山県内の津山市以外では岡山市造山古墳（第 78 図 10、註 15）、造山第 2 号墳（同 12、註 16）、総社市小造山古墳（同 11、註 17）、



第 78 図 口縁に突帯をもつ円筒埴輪 (1) (岡山県内、S = 1 : 8)

- 1 ~ 8 日上欲山古墳群
- 9 河辺上原 1 号墳
- 10 造山古墳
- 11 小造山古墳
- 12 造山第 2 号古墳
- 13 前池内 8 号墳
- 14 青崎天神山 6 号墳



第79図 口縁に突帯をもつ円筒埴輪(2)(縦内、S=1:8)

岡山市前池内8号墳（同13、註18）、甫崎天神山6号墳（同14、註19）にある。前池内8号墳と甫崎天神山6号墳は埴輪棺であり、土師の里8号墳（第79図19、註20）との関連が指摘されている。それ以外は大形の前方後円墳ないしはそれに付随する古墳である。造山古墳の出土から畿内の影響を受け、吉備地方南部では古墳の規模や墳形に応じて埴輪の規格性がある事が指摘されている（註21）。

津山市内では、日上戸山古墳群のほかに河辺上原1号墳（同9、註22）で1点出土している。直径16.5m程の円墳で、形象埴輪などの基部になる可能性もある。戸山古墳群の場合はヨコハケを施すものがほとんどで、タテハケのものが1点ある（同8）。これも基部の可能性がある。河辺上原1号墳はタテハケをもつもので、戸山古墳群より後出である。現在の所、戸山古墳群より古い例は知られていないため、この時期（TK 47型式）に伝わってきたものである。なおかつ、古墳群内で突出度の高いものと低いものとがあり、これらが時間的な変遷と考えられていることから、伝播後もある程度の期間埴輪が造られた可能性もある。ただ両者の埴輪に特別の差は見られず、外面調整も良く似ている。また、細部を見れば口縁内側に1条の沈線がめぐるもの（同2・4）もある事から、これらの違いは時期差ではなく、同一グループ内の工人の差である事も考えられる。

さらに、この埴輪の流通経路を推測すれば、古市古墳群周辺の畿内がその中心地で県内では吉備南部の造山古墳周辺と日上戸山古墳群周辺しか出土例が今のところない。このため、畿内から吉備を経由した場合と吉備を経由しない場合などが考えられる。今までの所、吉備南部の造山古墳などとは時期的な隔たりがかなりあり、南部において本例と同時期の類例が見られない事や、この時期前後の埴輪の特徴に、例えば津山市橋本塚1号墳（註23）の場合のように、畿内の淡輪技法（註24）が見られ、外面にタタキを施しているものがあり、この類例も吉備南部地域に見られない。このため、これら畿内系の技術は吉井川沿いに畿内から直接はいったものと推測される。

また、C類とした円筒埴輪も特異である。通常口縁と底部以外の胴部の突帯間はほぼ同一の場合が多いが、本例は3段目より2段目の方が短いものがある。これと良く似たものが藤井寺市の土師の里遺跡で出土している（註25）。外面は斜め方向のタテハケでプロボーションは良く似ている。ただ、外面のタテハケは2段目が省略されている。両者は時間的な違いがあるが、C類の製作に関与していた可能性が推測される。ちなみにこの遺跡からも口縁に突帯をもつ埴輪が出土する。

以上から、少なくともA類の口縁部突帯、C類の製作には古市古墳群周辺の製作工人の関与が推測され、なおかつ長期にわたってかかわっていた事が考えられる。

（朝顔形埴輪）

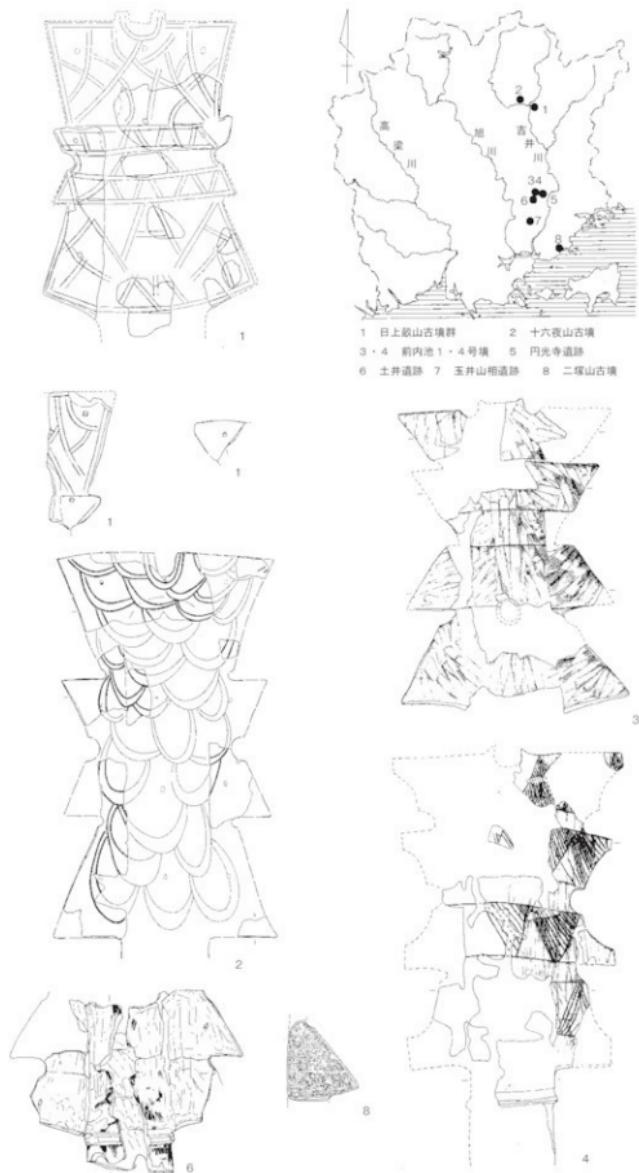
朝顔形埴輪も口縁部以外の全容が復元できるもの（第36図23、第55図8）があり、これはA2類の円筒埴輪と共伴するものである。基本はA2類の円筒埴輪の上に二重に開いた肩部から口縁部を作り付けているもので、共通の規格性が読み取れる。ただ、外面調整は1次調整のタテハケのみである。円孔は、3・4段目に對に見られるものと2・4段目に見られるものとがある。B類に共伴するもの（第20図13）も全容は不明であるが、外面のタテハケは同様なもので、このB類の円筒埴輪を基本にしている可能性が考えられる。C類に共伴するものは明瞭な比較資料がないため詳細は不明である。

（形象埴輪）

形象埴輪としては盾、人物、馬、家、鳥などがある。

〈盾〉

盾はいわゆる石見型である。今回の調査でも58・60号墳で出土しており、旧調査では、旧51・52号墳(58・



第 80 図 岡山県内出土石見型盾形埴輪 (S = 1 : 10)

59号墳）から出土しているが、前述のように両者の破片が接合するものがある。このため、今回の調査を踏まえ 58・60号墳からの出土は確実だが、59号墳については保留しておきたい。旧調査には破片がかなりの数あり、総数は4個体以上ある。

石見型の盾形埴輪は、奈良県磯辯郡三宅町に所在する石見遺跡（註26）から出土した埴輪を指標とする。鉄盾の系譜による盾を表現していると考えられてきた（註27）が、最近では盾の表現でなく、輶や鹿角、玉杖の頭飾りを模したものとし、単に「石見型埴輪」（註28）とするもの、權威の抽象的な表象として同様に「石見型埴輪」（註29）と呼ぶ見解もある。通常円筒埴輪を逆さにした基部に左右対称の鱗がつき4段からなりこの部分に文様を施す。岡山県内では、本例以外に10例あり、津山市十六夜山古墳（第80図2、註30）、赤磐市前内池1・4号墳（同3・4、註31）、同土井遺跡（同6、註32）、岡山市玉井山相遺跡（註33）、瀬戸内市二塚山古墳（同8、註34）などから出土している。本例は、各段を線刻で区切り、その中に直線や曲線を施しているが、十六夜山古墳は、各段を区切ることなく、曲線の線刻を全面に施している。前内池1・4号墳は4段に区切られ1号墳は無文で、4号墳は鋸歯文を各段に施し鱗の先端は尖っていない。土井遺跡は無文のようである。最近の研究（註35）では、本例や前内池1・4号墳は4分割線刻型、十六夜山古墳や土井遺跡は無分割型に分類される。共伴遺物から一番古いものは十六夜山古墳や前内池1・4号墳でTK 23～TK 47型式併行である。本例は時期的にはやや後出で、MT 15～TK 10型式のものである。また、土井遺跡は、窓跡からの出土で、時期はTK 43型式併行である。以上から伝播とともに早い段階で文様が簡略化している状況も伺える。現在までの所岡山県内の出土例は、吉井川流域沿いのものしかなく、その他の地域では見られない事から、この吉井川沿いに畿内地方から伝播したものと推測される。また、前述の研究では本例のように4分割線刻型はMT 15型式以降見られる事から時期的に該当するが、前内池1・4号墳の例は時期的にやや古相であり、十六夜山古墳の例も無分割型の中では時間が古くなるようである。本例は忠実に文様を表現しているものと考えられ、逆に十六夜山古墳や前内池1・4号墳のように文様が簡略化、省略したようなものがあり、これらは伝播した系譜が異なる可能性が考えられる。また、時期的な経過から津山市内などに伝播後、吉井川沿いの南部を中心に広まったものと推測される。

<人物>

人物埴輪は胴の部分に甲を表現したもの（58号墳）、と旧調査の巫女（57か59号墳）などがある。甲をつけたもの（第21図20）は、細かく区切ったその模様構成から、挂甲などの一部を表現しているものとも解されるが、挂甲とした場合でも实物を見て表現しているには、区画が大きくやや雑な感もある。このため、实物を見ずにやや抽象的に表現しているのかもしれない。類例は少なく、埼玉県丸墓通出土（註36）のものが良く似ている。これは同様な区画を施すものの中を細かく区切ってはいない。

巫女は意須比を着て手を合わせているもの（第65図27）と羽根のようなものをつけ、手を広げているもの（同28）がある。前者は一般的に見られる形態のものであるが、後者は何を表現しているのか周辺地域でも類例は知られていない。巫女としているが、用途が違う可能性もある。いずれも粘土を貼り付け首飾りを表現している。

岡山県内で人物埴輪は19例ほど知られているが、頭部や手だけなど全体像がわかるものは少ない。津山市内では丹口車塚古墳（註37）で手や胴のあたりが出土している。

<馬>

馬形埴輪が、69号墳や旧調査（57か59号墳）で出土している。69号墳のもの（第36図9～16）は

鞍から尻尾の部分や口や鼻、鏡板の顔の部分が残存する。旧調査のもの（第67図34～37）は足の部分や髪で、その他図示していないが目、耳の部分がある。前者の鏡板の形態は「字形」のものを表現していると考えられ、杏葉は劍菱形である可能性がある。後者の足には蹄を表現し、整形後一度縦方向に切断して粘土を取り除き再度細くしづら形で接合する、切開再接合が見られ、これは関東地方に見られる技法で西日本では非常に少ない（註38）。また、「字形鏡板付轡」を伴う埴輪はTK47型式からTK43型式にかけて見られ、実際の馬具の出土時期とは差が見られる。馬形埴輪の製作にあたって現実の馬装された馬を見て詳細に模すではなく、工人の間で認識された一定のイメージ、決まりによって製作されたものであると言った見解もある（註39）。馬の埴輪は岡山県内では、真庭市四つ塚13号墳（註40）に見られるぐらいで少ない。四つ塚13号墳は鞍や泥障以外は省略されており、時期的には本例より後出であろう。

＜鶴＞

鶴の埴輪が旧調査（57か59号墳）で出土している。埴輪の鳥については、すでに分類された論考（註41）があり、さらに鶴については頭部の目や耳羽の表現などでも分類されている（註42）。後者の分類によれば本例は耳表現が刺突であり（耳孔型）、足表現が線刻で羽表現も線刻、体部境が突帯に分類され、時期的には3時期に分けられ、その2期の所産となる。この2期の特徴は30m以下の小規模古墳に見られる事から、鶴形埴輪の使用が限られた首長層から幅広い層に拡大した時期で、本例が円墳からの出土である事からもうなづける。なお、本例の雌雄であるが、これについても論考（註43）があり、足の表現にケヅメがあり、尾の中心線上に垂直に立てた飾り羽が粘土で表現されていれば雄である。本例の第66図29は尾にその表現があり、破片の足が同一であれば、ケヅメの表現があり雄となる。同30は破片のため明瞭でないが、29よりは小ぶりであり雌の可能性が大きい。ただ足を表現した破片はケヅメを表現したものがあり胎土は良く似ている。これが同一となると雄の可能性があるが、さらに別個体が存在している可能性もある。

岡山県内では岡山市金蔵山古墳（註44）、馬形埴輪の出土した真庭市四つ塚13号墳、総社市西山26号墳（註45）に出土例がある。金蔵山古墳は頭部と体部で耳は粘土を貼り付けて表現する。四つ塚13号墳は5個体あり、足の表現はないが、大きさから雄が1、雌が4個体とされる。西山26号は頭部片のみである。金蔵山古墳が本例より古く、西山26号墳はやや先行する時期、四つ塚13号墳は後出であろう。

＜家＞

家形埴輪は58号墳などで出土するが、屋根の一部と堅魚木のみである。そのため、家の構造など詳細は明瞭でない。津山市内では、井口車塚古墳で屋根の破風部分などが出土している。

（小郷）

（3）集落跡について

東西丘陵部に集落跡が存在する事が判明している。主な遺構は住居跡、建物跡、土壤、柱穴などである。出土遺物は土器と石器がある。

東側丘陵のT3-11で検出したSH1は一部分のため規模等は不明だが、時期は弥生時代と推測される。西側丘陵のT4-3で検出したSH2は方形住居で数点の土器が出土した。その内1点は吉備南部の甕（第49図3）によく似ている。胎土分析の結果吉備南部（足守川や旭川）の胎土とは異なっており、在地産の可能性もあるが、吉井川下流域との比較ができるないため、これについては今後の

課題である（第V章参照）。この住居からは玉ねぎ形の胴部をもつ二重口縁の壺（同1）も出土している。この吉備型壺は津山市堀坂町分田遺跡（註46）などで出土する。二重口縁の壺は類例がほとんど無く色調が他とは異なるが胎土分析では在地のものと差が見られない。吉備型の壺は下田所式（註47）併行で、二重口縁の壺は平らな底部が見られるため、の中でもやや古相の可能性がある。

西側丘陵のT 4 - 6で検出したS H 3は円形住居と推測される。時期は弥生時代と思われる。

東側丘陵のT 5 - 3で検出したS H 4は隅丸方形の住居で、時期は弥生時代と思われる。

同じくT 5 - 4で検出したS H 5は円形住居と推測され、時期は弥生時代と思われる。T 5 - 1のS K 1から出土した土器（第58図1）は弥生時代中期後半のものである。

また、西側丘陵ではかつて住居跡の調査がされている。隅丸方形住居跡2軒で弥生土器が出土しており後期の所産である（註48）。この事から西側丘陵には弥生時代後期から古墳時代にいたる集落が、東側には弥生時代中期から後期の集落が存在していたものと推測される。

（小郷）

（註1）古墳の規模等は澤田秀実氏にご教示を得た。澤田秀実・松本和男2006『錦青塚古墳』『美作町史資料編Ⅰ』美作市

（註2）今井亮「津山市川崎玉塚大塚調査報告」『津山市文化財調査報第1集1960年度』津山市教育委員会

（註3）村上幸雄1980『コウデン2号墳』『稼山遺跡群Ⅱ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会

（註4）川西宏幸1978『円筒埴輪論』『考古学雑誌第64巻第2号』日本考古学会

（註5）一瀬和夫1988『古市古墳群における大型古墳埴輪集成』『大水川改修にともなう発掘調査概要V』大阪府教育委員会

（註6）一瀬和夫ほか1981『応神陵古墳外提发掘調査概要』大阪府教育委員会・一瀬和夫1989『大水川改修にともなう発掘調査概要VI』大阪府教育委員会

（註7）河内一浩はか2002『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成11年度－』『羽曳野市埋蔵文化財調査報告書46』羽曳野市教育委員会

（註8）徳誠志2004『允恭天皇惠我長野北陵防災工事箇所の調査』『陵墓関係論文集V』宮内庁書陵部陵墓課、天野未嘉はか1990『石川流域遺跡群発掘調査報告書V』『藤井寺市文化財報告第6集』藤井寺市教育委員会・上田勝はか1997『石川流域遺跡群発掘調査報告書XII』『藤井寺市文化財報告第15集』藤井寺市教育委員会

（註9）上田勝はか1991『石川流域遺跡群発掘調査報告書VI』『藤井寺市文化財報告第7集』藤井寺市教育委員会・佐々木理はか2001『石川流域遺跡群発掘調査報告書XVI』『藤井寺市文化財報告第21集』藤井寺市教育委員会

（註10）吉田野々はか2000『応神陵古墳外堤出土土円筒埴輪の研究』『埴輪論叢第2号』埴輪検討会

（註11）笠井敏光・吉田珠己1992『市古古墳群の埴輪の規格性』『古代文化VOL.44』古代學協會

（註12）伊藤聖浩はか1993『峯ヶ塚古墳概観』羽曳野市教育委員会

（註13）森田克行はか1993『新池』『高槻市文化財調査報告書第17号』高槻市教育委員会

（註14）西都市女狹槌塚古墳にある。福尾正彦1988『女狹槌塚陵墓参考地出土の埴輪』『陵墓関係論文集<続>』宮内庁書陵部陵墓課、福尾正彦2000『男狹槌塚女狹槌塚陵墓参考地外周坪垣改修その工事に伴う調査』『陵墓関係論文集IV』宮内庁書陵部陵墓課

（註15）野崎賛博2000『造山古墳と小方墳』『古代吉備第22集』古代吉備研究会

（註16）安川廣2000『造山第2号古墳』岡山市教育委員会

（註17）前角和夫はか1993『折敷山遺跡・雲上山1号墳』『総社市埋蔵文化財発掘調査報告10』総社市教育委員会

（註18）中野雅美1994『前池内遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会

（註19）宇垣匡雅1994『甫帝山神道跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会

（註20）川村和子はか1994『土師の里8号墳』『藤井寺市文化財報告第11集』藤井寺市教育委員会

（註21）註15

（註22）小郷利幸1994『河辺上原遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集』河辺上原遺跡発掘調査委員会

（註23）小郷利幸2003『橋本塚古墳群』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第73集』津山市教育委員会

（註24）坂清はか1989『木ノ本釜山（木ノ本皿）遺跡』同志社大学考古学研究室・和歌山市教育委員会

（註25）佐々木理はか2004『石川流域遺跡群発掘調査報告書XIX』『藤井寺市文化財報告第24集』藤井寺市教育委員会

（註26）末永雅雄1925『磯城郡三宅村石見出土埴輪報告』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第13号』

（註27）袖元哲夫1985『大和における盾形埴輪の系譜』『岩室池古墳・平等坊・岩室遺跡』（天理市埋蔵文化財調査報告第2集）天理市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所

（註28）河内一浩2000『紀伊にみる石見型埴輪の様相』『紀伊考古学研究第3号』紀伊考古学研究会

（註29）和田一之輔2006『石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相』『考古学研究第53巻第3号』考古学研

究会

- (註30) 尾上元規ほか1998「十六夜山古墳・十六夜山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130』岡山県教育委員会
- (註31) 内藤善史ほか2003「前内池古墳群ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174』岡山県教育委員会
- (註32) 重根弘和ほか2005「土井遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告191』岡山県教育委員会
- (註33) 松本和男ほか1987「玉井山相遺跡・茂登大塚古墳」『岡山県埋蔵文化財調査報告17』岡山県教育委員会、同1997「玉井山相遺跡」「吉備大地からのメッセージ」岡山県立博物館振興会
- (註34) 亀田修一1997「二塚山古墳」「牛窓町史資料編Ⅱ」牛窓町史編纂委員会
- (註35) 許29
- (註36) 塚田良道2001「埼玉丸墓出土の人物埴輪」『埴輪研究会誌第5号』埴輪研究会
- (註37) 小郡利幸1994「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集』津山市教育委員会
- (註38) 関東（群馬県）では6世紀前半から中葉に見られる。井上裕一・太田博之氏にご教示を得た。
- (註39) 宮代栄一2002「馬具一埴輪の馬装と現実の馬装ー」『季刊考古学第79号』雄山閣
- (註40) 近藤義郎1982「蒜山原四つ塚古墳群」岡山県真庭郡八束村
- (註41) 貫来孝代1999「埴輪の鳥はどんな鳥」『第5回特別展鳥の考古学』かみつけの里博物館、貫来孝代2002「埴輪の鳥」『日本考古学第14号』日本考古学協会
- (註42) 忽那敏三2001「鶴形埴輪の変遷と性格」『考古学研究第48巻第3号』考古学研究会
- (註43) 貫来孝代2003「鳥の埴輪の難と雄」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念事業会、鶴形埴輪については貫来孝代氏にご教示を得た。
- (註44) 西谷眞治・鎌木義昌1989「金蔵山古墳」『倉敷考古館研究報告第1冊』木耳社
- (註45) 荣田英樹ほか1997「西山遺跡・西山古墳群ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121』岡山県教育委員会
- (註46) 豊島雪絵ほか2006「堀坂地内遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第76集』津山市教育委員会
- (註47) 柳瀬昭彦ほか1977「川入・上東」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16」岡山県教育委員会
- (註48) 今井亮1966「津山市日上歟山西住居址群」『津山市文化財調査略報7』津山市教育委員会

2. 日上歟山古墳群をめぐる諸問題

(1) 美作の埴輪とその特質—加茂川流域のIV期～V期を中心として—

美作で埴輪の出土した古墳は約60基を数える。その内時期が判明しているものでは、前・中期が少なく、中期末から後期が圧倒的に多い。

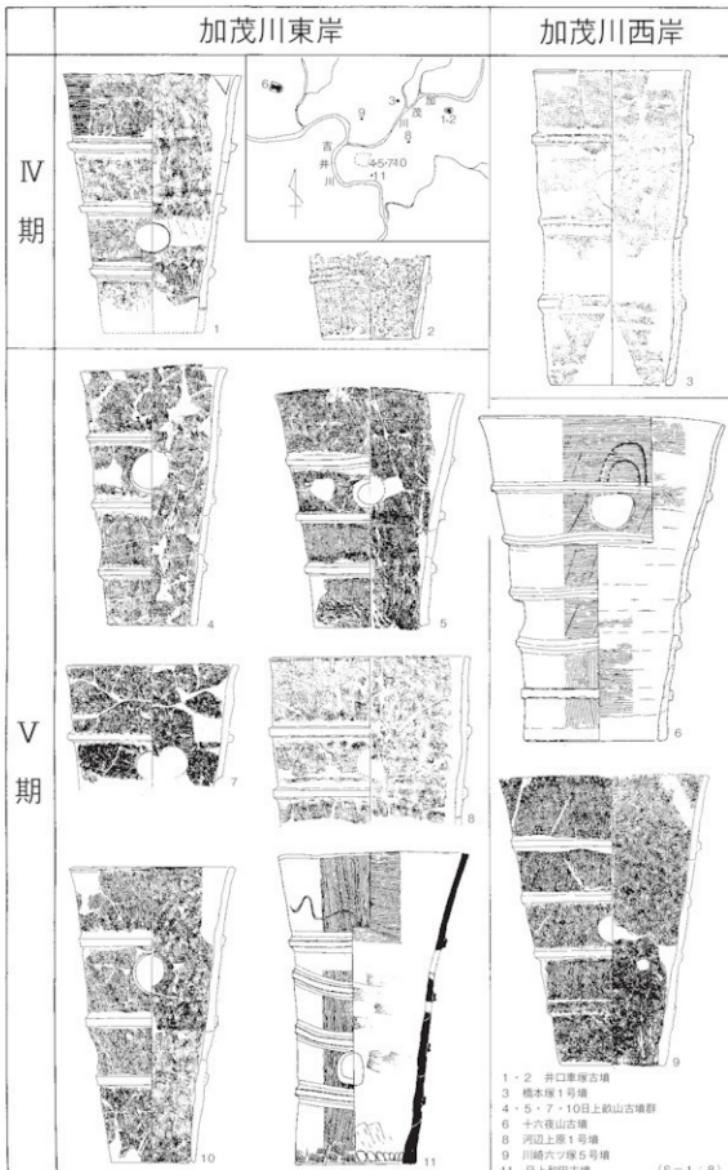
前期の例は津山市美和山1～3号墳（前方後円墳81m、円墳34m、円墳36m、註1）がある。またこれら埴輪には線刻が見られこれが、いわゆる特殊器台型埴輪の系譜によるものか、全体像が明瞭でないため定かではないが、隣接する二宮遺跡（註2）の埴輪には先刻が見られないため単発的なものであろう。これら美和山古墳群周辺で埴輪をもつ古墳の系譜を考えると、時期はやや下るが西方高所にある下田邑局笠古墳（円墳30m、註3）が考えられる。葺石を伴い埴輪が採集されており、立地状況から美咲町月の輪古墳（円墳60m、註4）と同一時期の可能性が指摘できる。他には津山市奥の前古墳（前方後円墳68m、註5）があり埴輪は梢円形の円筒埴輪である。このように前期においては、前方後円墳など一部で埴輪を使用する。なお、埴輪を使用しないものは、土師器の二重口縁の壺を使用しており、日上天王山古墳（前方後円墳57m、註6）、鏡野町赤崎古墳（前方後円墳45m、註7）、田邑丸山2号墳（前方後方墳40m、註8）などがある。

前期末から中期前半頃においては、月の輪古墳に代表されるように径50mを超える円墳が首長墳であるが、これら円墳があるのは月の輪古墳周辺のみで、隣接する釜の上古墳（円墳59m、註9）にもヨコハケをもつ埴輪がある。これら大形円墳の下に属しているのが、小形の円・方墳であるが、当時は方墳が主流で、下道山南古墳（方墳15m、註10）のように埴輪を少量もつものがある。後半になると、須恵器の導入と相成って埴輪を使用するのは径30mクラスの円墳などになり、中期末以降は埴輪を使用する古墳も増え、20mに満たない円墳などにも使用されるようになる。

日上歟山古墳群のある加茂川流域の中期後半から後期前半のおよそIV期後半からV期前半の埴輪のおまかなか変遷を表したのが第81図である。

加茂川東岸の井口車塚古墳（第81図1・2、帆立貝35m、註11）には形象埴輪（盾・人物・家など）も見られ、埴輪に須恵質のものが見られる。3条突帯で外面の底部以外はヨコハケである（1）。このヨコハケはBc種（註12）ヨコハケで一部ではやや傾いたBd種に近いものも見られ、基本は突帯間を1回でめぐっている。また、最下段の突帯に押印技法（註13）のようにやや扁平なものも見られる（2）。報告書では、ヨコハケをCc種（註14）とし、陥塚と考えられる円墳出土の須恵器からV期の埴輪としたが、その後再考しIV期に改めた。西岸の橋本塚1号墳（同3、円墳30m、註15）には、淡輪技法（註16）があり、タタキがヨコハケ風に施されている。このことから、埴輪製作に須恵器の技術が導入されている。同様に底部のみヨコハケ風のタタキが省略されており、形態は異なるがヨコハケを施すといった技法は井口車塚古墳と同じで、同様にIV期の埴輪であろう。この埴輪は系譜的には断絶する。以上から、少なくともこの時期東西両岸に技法の違う埴輪が見られる。

中期末以降後期前にかけて、古墳群の形態が変化する。径10～20mクラスの円墳が多数造られる。これら古墳を統括したのは全長20～60mの前方後円墳であるが、これら円墳にも埴輪を作うものが増えてくる。日上歟山古墳群で出土したA類（同4・5）はTK47型式の須恵器と共に、B類（同7）はMT15型式～TK10型式、C類（同10）はTK10型式と共に作る。「円筒埴輪総論」ではこのA類をIV期、B・C類をV期としている。A類にはヨコハケが見られるが、古備ではV期まで残るとされ（註



第 81 図 加茂川流域の円筒埴輪の変遷

17)、このA類には底部調整も見られるので、A～C類はいずれもV期の範疇で考えたい。A類と同じ時期の西岸にはやや離れた位置ではあるが、十六夜山古墳（同6、前方後円墳60m、註18）が造られる。埴輪、規模が異なるため埴輪も大形であるが、5条突帯でB種ヨコハケが見られ、最下段の突帯は押圧技法である。

B類の時期は河辺上原1号墳（同8、円墳16.5m、註19）に類例がある。突帯間の距離など全体の形状やタテハケの状況、胎土が良く似ているものがある。同一の窯で製作された可能性がある。この古墳には口縁部に突帯がめぐるものもある。この時期の西岸には六ツ塚古墳群（註20）があり、この5号墳（同9、円墳15m）の埴輪は4条突帯で外面はタテハケ、内面はヨコ・ナナメハケで底部調整が見られ、押圧技法を伴う。おそらく、東岸がこの時期3条突帯にはば統一され押圧技法をほとんど伴わない（註21）ため、六ツ塚古墳群の埴輪は十六夜山古墳からの系譜が推測される。吉備南部の押圧技法の編年（註22）では須恵器編年のTK 216からTK 10型式まで3段階に分けられ、加茂川流域においても初現が井口車塚古墳（TK 208型式か）で、十六夜山古墳（TK 47型式）、六ツ塚5号墳（MT 15～TK 10型式）とほぼ同様の系譜である事がわかる。

C類の時期の類例は、東岸では日上和田古墳（同11、円墳19m、註23）があるが、4条突帯となっている。この4条突帯は東岸には見られないもので、西岸の六ツ塚古墳群にあり、内面のハケ調整などの系譜が川をわたって伝わっているものと推測されるが、押圧技法は見られない。この時期以降の埴輪の規格性は明瞭でなく、横穴式石室墳での埴輪はほとんど見られなくなる。

以上から加茂川流域の埴輪の特性をまとめると、IV期の後半の段階にはば東西两岸に埴輪が見られ、その特徴には埴輪工人の系譜的な違いが見られる。おそらく、その技術的系譜は、一部で井口車塚古墳に吉備南部の押圧技法的なものが見られるが、その他は畿内地方からの影響である。V期になり、西岸には押圧技法が見られ、次の時期にも同様の技法が見られるためある程度系譜がおえる。ただ、東岸については、今の所この技法は井口車塚古墳以降ほとんど見られず、日上戸山古墳群のA類には口縁部に突帯がめぐる畿内地方の特徴も見られ、両岸において技術の系譜が異なるようである。ちなみに、この時期以降两岸で石見型の盾形埴輪も見られるようになるが、東西で文様が異なりこれも系譜が異なる。V期の後半になり横穴式石室が導入されると、埴輪はほとんど使用されなくなる。これに代わるように陶棺が埴輪として使用される。陶棺の製作には埴輪工人が大きくかかわっている事が考えられ、この陶棺が急速に美作全域に広まった。このため、陶棺にとって代わられた埴輪自体の生産はほとんど終焉を迎えるのである。

（小郷）

（2）日上戸山古墳群の評価—その特質—

日上戸山古墳群は今回の調査の結果、総数70基以上はある事、古墳群の時期は、南端にある前期の日上天王山古墳築造後から後期の6世紀前半頃まで築造されていることが判明した。その特徴は

(A) 前方後円墳は日上天王山古墳と最終段階の58号墳の2基がある。

(B) 古墳群の大半を占める中期末から後期前半の古墳は埴輪をもつものが多く見られ、また埴輪の種類、量が豊富である。埴輪の中に畿内の特徴が見られるものがある。

(C) 初期の横穴式石室墳がみられない。

以上3点の特徴を踏まえ日上戸山古墳群の位置づけを考えたい。

本古墳群の南端に位置する日上天王山古墳は加茂川が吉井川に合流する地点に立地する。この場所は吉井川を南から上ってくれば、一番に目に入る場所で、現に古墳からの眺望もきく。立地的には水路交通の要衝といえる。本古墳には埴輪は見られないが、畿内的な二重口縁の壺が出土する。その後北端に1号墳が造られる。1号墳は吉井川からは望めないが、逆に加茂川を見渡すことができる真反対の立地である。これは、天王山古墳からは見えない西岸部ないしは、加茂川上流部を意識した立地とも言える。その後、中間を埋める形で古墳群が形成される。

70基程ある古墳群の大半は5世紀の末から6世紀の前半頃のものと推測される。周辺の同時期の古墳群は本古墳群の東の地域に、数基から10数基単位で存在する。例えば、長畝山北古墳群（12基、註24）、長畝山古墳群（10数基、註25）、河辺上原古墳群（3基）、河辺小学校裏古墳群（7基、註26）などである。これらを併せてこの地区的古墳は100基以上となり、美作の他の地域にこれほどの古墳群は見られない。上記の古墳群の属性を比較すると、各古墳群とも副葬品に須恵器や鉄器などが豊富に見られるのが特徴である。しかし、埴輪の出土をみると、長畝山北古墳群では12基中4号墳の1基のみ、河辺上原古墳群は3基中1号墳の1基のみである。このように、埴輪をもつ古墳は古墳群中1基あるのが普通である。日上畝山古墳群では、今回調査した古墳だけでも7基で埴輪の出土があり、古墳自体の数も多いが埴輪出土古墳の多さ、さらに形象埴輪の質量とも豊富である。これが他の古墳群との大きな違いである。埴輪はいわゆる前期古墳から首長祭式に使用されてきたもので、その意味では本古墳群では埴輪祭式が中期の末以降も継続されてきた事が伺え、さらに、それが円墳などの小規模古墳にも採用されているのである。また、古墳群の最終段階には前方後円墳を築いている。さらに埴輪の製作には畿内地方の技術が大きくかかわっている事は、口縁に突帯をもつ円筒埴輪、石見型盾形埴輪の出土などでも明らかであり、その関わりは非常に大きいといえる。口縁に突帯をもつ埴輪は畿内地方の大形の前方後円墳とそれに付随する円墳などにしか見られない。吉備地方南部でも岡山市造山古墳（註27）など大形の前方後円墳などとそれに付随する古墳のみである。その後系譜が途絶え例えは総社市作山古墳（註28）には同様の埴輪は現在までの所知られておらず、赤磐市両宮山古墳（註29）は埴輪をもっていない。日上畝山古墳群に同様の埴輪が伝わったのはその後である。つまり、吉備南部でほとんど見られなくなつた時期に伝わったのである。くしくもこの時期を境に美作地方の古墳で埴輪が多数見られるようになり、その埴輪の製作に畿内地方の技術が大きく関わるようになってくる。この事は、畿内政権が吉井川沿いに埴輪などの技術を伝播させている事にはかならない。

この吉井川を考えた場合、中流域にある美咲町月の輪古墳（円墳 60 m）抜きには語れない。美作地方最大の円墳で埴輪が豊富である。この月の輪古墳から日上天王山古墳までは直線で約14 kmである。月の輪古墳の造出しの埋葬施設から舟形土製品が出土している事から、その被葬者を河川交通に関する職掌をもつ人物とする考えもある（註30）。また、形象埴輪の特徴などは岡山市金蔵山古墳（前方後円墳 165 m、註31）に良く似ているといった指摘もある（註32）。おそらく金蔵山古墳が造られた時期、円墳の月の輪古墳が造られ、この吉井川中流域までが、いわゆる吉備南部の統率下であった事が伺える。その後はこの首長墳の系譜は数代で途絶えてしまう。

中期後半頃になり、外来文化が伝わり、美作地方の各地で古墳群が造営され始める。特に美作地方においては、埋葬施設に「渡来系」堅穴式石室（註33）を採用したり、一貫西3号墳（註34）で初期の馬具、西吉田北1号墳（註35）では鍛冶具、押入西1号墳（註36）で陶質土器が副葬されたりと外来文化が早く伝播しこれを受け入れている。特に鍛冶具が複数の古墳で見られる事から、鉄器の製作技術に

しては、かなり先進的であったと推測され、これに畿内政権はかなり目をつけていたものと考えられる。また一般に、日上歟山古墳群のようなこれだけの古墳群を築くだけの生活基盤、いわゆる集落を考えた場合、周辺地域だけでは到底説明がつかない。かつて、日上歟山古墳群の立地について、この場所は古墳群を築くために選地されていた地域であったという見解を述べたことがある（註37）。もちろん畿内政権の後ろ立てで古墳の造営、埴輪の製作などをとりおこなっているのである。これはまさしく畿内政権における吉備南部地域に対する遠まわしの牽制である。日上歟山古墳群では、最終段階のいわゆる美作地方に横穴式石室が導入される前に前方後円墳（58号墳）が築かれる。おそらく、同時期では最大クラスで、加茂川流域では西岸に玉琳大塚古墳（註38）がありこれが双壁である。この58号墳以降古墳はほとんど造られなくなるが、この日上歟山古墳群の丘陵においては、前期の段階と6世紀の前半階に、前方後円墳である首長墳が築かれ、この古墳群の立地場所が古墳時代の前期～後期を通じて良好な場所として認識されていた事が考えられる。これには、まさしく物資及びその技術を運んだであろう吉井川の水運が大きくかかわっているものと推測される。

また、本古墳群に横穴式石室墳が見られないのも特徴である。横穴式石室墳を築く場所がまったく無かったわけではなく、この場所は、さけられているようである。周辺の横穴式石室墳はケズレ塚古墳（註39）、的場古墳群（註40）のようにやや奥まった丘陵の斜面などに単独ないしは数基で群をなすが、ある程度まとまつたものは見られない。このようにいわゆる初期の群集墳と横穴式石室を伴う群集墳とが違う地域に築かれる例が多く、これら形成の契機は大きく異なるとされる（註41）。美作で最初に横穴式石室が導入された佐良山地区では、58号墳と同時期と推測される高野山根1号墳（前方後円墳、32m、註42）、次の時期で最初の横穴式石室墳である中宮1号墳（帆立貝、23m、註43）、高野山根2号墳（前方後円墳、40m、註43）と系譜がおえるが、日上歟山古墳群のように、前期からは築かれていない。この佐良山地区は、中期以降の古墳群がほとんどで、ルート的には現在の国道53号線沿いの津山に入る要部分であり、これを南下すれば旭川水系となり、より吉備南部との関係が伺える立地である。この事から横穴式石室の導入にあたっては、吉井川水系よりも、旭川水系から陸路となる佐良山地区に最初に導入される事になり、これにより前期から続いた吉井川水系の日上歟山古墳群のある丘陵の役目は終焉するのである。また、前述のように初期の群集墳と横穴式石室の群集墳とは系譜や、形成の契機も異なり、おそらくそこには畿内政権による政治的な背景が看取される事は言うまでもない。しかし、これについての解釈は、一元的に述べるには難解であり、稿を改める事としたい。

（小郷）

（註1）中山俊紀1992「史跡美和山古墳群」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第42集津市教育委員会
（註2）高畠知功ほか1978「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会
（註3）分布調査で発見。後に城として利用される。

（註4）近藤義郎1960「月の輪古墳」月の輪古墳刊行会

（註5）澤田秀実2005「奥の前1号墳第6次発掘調査の概要」「前方後円墳の築造規格からみた古墳時代の政治的変動的研究」大阪市立大学大学院文学研究科 岸本直文

（註6）近藤義郎ほか1997「日上天王山古墳」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第60集』津市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会

（註7）近藤義郎2000「赤崎古墳」『鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第6集』鏡野町史編集委員会・岡山県苦豆郡鏡野町教育委員会

（註8）小郷利幸2000「田邑丸山古墳・田邑丸山遺跡」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第67集』津市土地開発公社・津市教育委員会

（註9）釜の上古墳測量調査団2003「釜の上古墳測量調査概要」「月の輪古墳発掘に学ぶ」月の輪古墳発掘50周年記念祭実行委員会

（註10）岡本寛久1977「下道山古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』岡山県教育委員会

（註11）小郷利幸1994「井口車塚古墳」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第52集』津市教育委員会

- (註12) 一瀬和夫1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要』大阪府教育委員会
- (註13) 川西宏幸1978「円筒埴輪論述」『考古学雑誌第64巻第2号』日本考古学会、井口車塚古墳の埴輪については、米沢雅美式にご教示いただいた。
- (註14) 訂13
- (註15) 小郷利幸2003「橋本塚古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第73集』津山市教育委員会
- (註16) 坂清ほか1989「木ノ本塚山（木ノ本Ⅲ）遺跡」同志社大学考古学研究室・和歌山市教育委員会
- (註17) 島崎東1992「埴輪の種類と編年中・四国」『古墳時代の研究9古墳Ⅲ埴輪』雄山園
- (註18) 尾上元規ほか1998「十六夜山古墳・十六夜山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130』岡山県教育委員会
- (註19) 小郷利幸1994「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集』河辺上原遺跡発掘調査委員会
- (註20) 河本清1986「六ツ塚古墳群」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会
- (註21) 日上歎山古墳群の旧調査で1点（第62図12）確認しているが、普遍的ではないようである。
- (註22) 野崎賀博1999「埴輪製作技法の伝播とその背景」『考古学研究第46巻第1号』考古学研究会
- (註23) 行田裕美1981「日上と田古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集』津山市教育委員会、行田裕美1996「『日上と田古墳』増補」『年報津山弥生の里第3号』津山弥生の里文化財センター
- (註24) 今井亮1972「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第1巻原始・古代』津山市史編さん委員会、坂本平1996「長歎山2号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里第3号』津山弥生の里文化財センター
- (註25) 行田裕美・木村祐子1992「長歎山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集』津山市教育委員会、行田裕美・小郷利幸1996「長歎山北1号墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集』津山市教育委員会
- (註26) 平岡正宏1998「河辺小学校裏古墳群発掘調査報告」『年報津山弥生の里第5号』津山弥生の里文化財センター
- (註27) 野崎賀博2000「造山古墳と小方墳」『古代吉備第22集』古代吉備研究会
- (註28) 前角舟ほか1993「折敷山遺跡・雲上山1号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告10』総社市教育委員会
- (註29) 宇垣匡雅2005「両宮山古墳」『赤磐市文化財調査報告第1集』岡山県赤磐市教育委員会
- (註30) 今井亮1988「吉備における古墳被葬者の検討—金成山古墳南石室と月の輪古墳造出し粘土被葬者の検討」『古代吉備第10集』古代吉備研究会
- (註31) 谷原義昌1989「金成山古墳」『倉敷考古館研究報告第1冊』木耳社
- (註32) 近藤義郎1998「月の輪古墳」『吉備考古ライブラリー1』吉備人出版
- (註33) 高田寛太1999「瀬戸内における淡米文化の受容と展開」『第46回埋蔵文化財研究集会淡米文化の受容と展開』埋蔵文化財研究会
- (註34) 行田裕美1990「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』津山市教育委員会
- (註35) 坂本心平・行田裕美1997「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集』津山市教育委員会
- (註36) 齋谷昭彦ほか1973「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会
- (註37) 小郷利幸1992「門の山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集』佐良山門の山古墳群発掘調査委員会・津山市教育委員会
- (註38) 今井亮「津山市川崎王塚大塚調査報告」『津山市文化財調査略報第1集1960年度』津山市教育委員会
- (註39) 行田裕美・小郷利幸1996「クズレ塚古墳・崩れ塚古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集』津山市教育委員会
- (註40) 安川豊史ほか2001「の場古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第70集』津山市教育委員会
- (註41) 林部均2004「初期群集墳と大型群集墳—とくに大和を中心として—」『畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣
- (註42) 安川豊史1986「高野山根1号墳・2号墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会
- (註43) 近藤義郎1952「佐良山古墳群の研究第1冊』津山市
- (註44) 内山敏行ほか1991「佐良山古墳群高野山根2号墳について」『古代吉備第13集』古代吉備研究会

埴輪観察表

番号	出土場所	分類	外面調整 (cm)	内部調整 (cm)	焼成	胎土	色調	備考
11-1	T 1 - 9 良土	内側	ナメハケ 4 本	ナメハケ 4 本	土筋質	3 mm以下砂粒	淡赤褐色	
2	T 1 - 9 良土	内側	不明	不明	不明	不	不	
19-1	T 2 - 3 周溝理土	内側	ヨコハケ 11 本	ナデ	須恵質	5 mm以下砂粒	青灰色	
21/T 2 - 3 周溝理土	内側	タテハケ 7 本	不	土筋質	3 mm以下砂粒	淡赤褐色		
3/T 2 - 3 周溝理土	形像	タテハケ 8 本	不	不	不	不	形像の基部	
4/T 2 - 3 周溝理土 (底)	内側	不明	不	不	5 mm以下砂粒	不		
5/T 2 - 3 周溝理土	盾	ナデ・線刻、円孔	不	不	1 mm以下砂粒	乳赤褐色	石見型	
6/T 2 - 3 周溝理土	盾	ナデ・円孔	不	不	2 mm以下砂粒	淡赤褐色	石見型	
7/T 2 - 6 周溝理土	内側	タテハケ 10 本	不	不	4 mm以下砂粒	不		
8/T 2 - 6 周溝理土	朝顔	不明	不	不	不	不		
20-9/T 2 - 8 周溝理土	内側	タテハケ 11 本	不	不	1 mm以下砂粒	乳赤褐色		
10/T 2 - 8 周溝理土	内側	タテハケ 7 本	タテハケ 7 本	不	1 cm以下砂粒	淡赤褐色		
11/T 2 - 8 周溝理土	内側	タテハケ 11 本	ナデ	不	3 mm以下砂粒	不		
12/T 2 - 8 周溝理土	朝顔	タテハケ 6 本	不	不	不	不		
13/T 2 - 8 周溝理土	朝顔	タテハケ 11 本	不	不	5 mm以下砂粒	不		
14/T 2 - 8 周溝理土	形像	タテハケ 8 本、円孔	不	不	不	不		
15/T 2 - 10 周溝理土	家	ナデ	不	不	2 mm以下砂粒	不		
21-16/T 2 - 11 周溝理土	内側	不明	ナデ	不	4 mm以下砂粒	不		
17/T 2 - 11 周溝理土 (底)	形像	タテハケ 11 本	不	不	3 mm以下砂粒	不	形像の基部	
18/T 2 - 11 周溝理土	人物	ナデ	不	不	1 mm以下砂粒	不		
19/T 2 - 11 周溝理土	人物	不	不	不	不	不		
20/T 2 - 11 周溝理土	人物	不、線刻	不	不	2 mm以下砂粒	乳赤褐色		
21/T 2 - 11 周溝理土	人物	ナデ	不	不	5 mm以下砂粒	淡赤褐色		
22/T 2 - 11 周溝理土	人物	ナデ	不	不	3 mm以下砂粒	不		
23/T 2 - 11 周溝理土	人物	不	不	不	不	不		
24/T 2 - 11 周溝理土	盾	不、線刻	不	不	不	不	石見型	
25/T 2 - 11 周溝理土	盾	ナデ・線刻、円孔	不	不	不	不	石見型	
22-26/T 2 - 13 周溝理土	内側	タテハケ 8 本	不	不	1 mm以下砂粒	不		
27/T 2 - 13 周溝理土	内側	ヨコハケ 1 本	不	不	3 mm以下砂粒	不	ヘラ記号<	
28/T 2 - 13 周溝理土	内側	タテハケ 6 本	不	不	2 mm以下砂粒	乳赤褐色		
29/T 2 - 13 周溝理土 (底)	内側	タテハケ 7 本	不	不	7 mm以下砂粒	淡赤褐色		
30/T 2 - 13 周溝理土	内側	ヨコナデ	ヨコナデ	不	1 mm以下砂粒	乳赤褐色		
31/T 2 - 13 周溝理土 (底)	形像	不明	不明	不	3 mm以下砂粒	淡赤褐色	形像の基部	
32/T 2 - 13 周溝理土 (底)	朝顔	タテハケ?	ナデ	不	不	不		
33/T 2 - 13 周溝理土 (底)	朝顔	不明	不明	不	5 mm以下砂粒	不		
34/T 2 - 13 周溝理土	家	ナデ	不	不	2 mm以下砂粒	不		
35/T 2 - 13 周溝理土 (底)	家	不	不	不	3 mm以下砂粒	不		
36/T 2 - 14 周溝理土	内側	不明	不明	中間	1 mm以下砂粒	乳白色		
37/T 2 - 14 周溝理土	内側	ナデ	不	不	不	不		
33-1/T 3 - 1 東周溝理土	内側	ヨコハケ 6 本	ナメハケ4本、ナデ	須恵質	2 mm以下砂粒	乳青灰色	ヘラ記号波状文	
2/T 3 - 2 西周溝理土	内側	タテハケ 8 本	ナデ	不	3 mm以下砂粒	不		
3/T 3 - 2 東周溝理土下層	内側	タテハケ 7 本	不	土筋質	2 mm以下砂粒	不		
4/T 3 - 2 東周溝理土下層	内側	タテハケ 7 本	不	不	不	不		
5/T 3 - 2 東周溝理土上層	内側	ヨコハケ 6 本	不	中間	不	淡灰褐色		
6/T 3 - 2 東周溝理土	内側	タテハケ 9 本	不	不	不	淡赤褐色		
7/T 3 - 2 東周溝理土	盾	ナデ・線刻	不	土筋質	3 mm以下砂粒	淡赤褐色	石見型	
34-8/T 3 - 4 南周溝理土	内側	タテハケ 8 本	不	不	2 mm以下砂粒	乳赤褐色		
9/T 3 - 4 北周溝理土	内側	ナデ	不	須恵質	不	暗青灰色		
10/T 3 - 4 南周溝理土	朝顔	タテハケ 7 本	ヨコハケ 8 本、ナデ	土筋質	不	乳赤褐色		
11/T 3 - 4 南周溝理土	盾	ナデ・線刻	ナデ	不	不	淡赤褐色	石見型	
12/T 3 - 4 南周溝理土	盾	不	不	不	不	不		
13/T 3 - 4 南周溝理土	盾	不	不	不	不	不		
14/T 3 - 4 南周溝理土	盾	不	不	不	不	不		
15/T 3 - 5 周溝理土	内側	タテハケ 7 本	不	不	不	不		
35-16/T 3 - 7 周溝理土	内側	ヨコハケ・タテハケ 5 本	ヨコハケ・タテハケ	須恵質	不	乳青灰色	ヘラ記号波状文、口縁突起	
17/T 3 - 7 周溝理土	内側	ヨコハケ・タテハケ 5 本	ヨコハケ・タテハケ	土筋質	5 mm以下砂粒	乳灰白色	口縁突起	
18/T 3 - 7 周溝理土	内側	ヨコハケ 5 本	不	不	不	不	口縁突起	
19/T 3 - 7 周溝理土	内側	ヨコハケ 6 本	不	中間	3 mm以下砂粒	淡灰褐色	ヘラ記号波状文	
20/T 3 - 7 周溝理土	朝顔	タテハケ 4 本	不	土筋質	不	淡赤褐色		
21/T 3 - 7 周溝理土	朝顔	タテハケ 6 本	不	不	不	不		
36-22/T 3 - 7 周溝理土	朝顔	タテハケ 3~6 本	不	不	2 mm以下砂粒	不		
23/T 3 - 7 周溝理土	朝顔	タテハケ 5 本	不	不	不	不		
24/T 3 - 8 良土	内側	タテハケ 6 本	不	不	不	不		
25/T 3 - 8 良土	内側	ヨコハケ 4 本、ナデ	ヨコハケ 4 本、ナデ	4 mm以下砂粒	淡赤褐色			
37-26/T 3 - 11 周溝理土	内側	ヨコハケ	ナデ	不	2 mm以下砂粒	乳赤褐色	ヘラ記号波状文	
27/T 3 - 11 周溝理土	内側	ヨコハケ・タテハケ 5 本	不	不	不	不		
28/T 3 - 11 周溝理土	朝顔	タテハケ 5 本	不	不	3 mm以下砂粒	淡灰褐色		

29	T 3 - 11 周溝埋土	朝顔	タテハケ 6 本	+	+	+	+	
30	T 3 - 11 周溝埋土	内側 ナデ	+	+	+	+	乳赤褐色	
31	T 3 - 12 周溝埋土	内側 不明	+	+	2 mm以下砂粒	+		
32	T 3 - 14 周溝埋土下層	内側	ヨコハケ	ヨコハケ	+	+		
33	T 3 - 14 周溝埋土下層	内側	ヨコハケ 4 本	ヨコハケ、ナデ	+	+		
34	T 3 - 14 周溝埋土下層	内側	ヨコハケ 4 本	ナデ	+	+		
35	T 3 - 14 周溝埋土下層	人物 ナデ	+	+	3 mm以下砂粒	淡赤褐色		
36	T 3 - 14 周溝埋土下層	家	ナデ	+	+	+	乳赤褐色	
55-1	T 5 - 1 表土	内側	ヨコハケ 8 本	ナデ	須恵質	2 mm以下砂粒	暗赤褐色	
2	T 5 - 8 上層(造成土)	内側	タテハケ 5 本	+	土質質	+	乳赤褐色	
3	T 5 - 7 周溝埋土	内側 テハケ 5 本	ヨコハケ 4 ~ 7 本、タテハケ 5 本	+	+	+	口緑突等	
4	T 5 - 7 周溝埋土	内側	ヨコハケ 4 ~ 6 本	+	+	+	口緑突等	
5	T 5 - 7 上層(造成土)	内側	タテハケ 9 本	タテハケ 日本	+			
6	T 5 - 7 周溝埋土	内側	タテハケ 5 本	ナデ	+	2 mm以下砂粒	乳赤褐色	口緑突等
7	T 5 - 7 上層(造成土)	内側	タテハケ 8 本	ナデ	+	+	淡赤褐色	
8	T 5 - 7 周溝埋土	朝顔	タテハケ 5 本	ヨコハケ 5 本、ナデ	+	+	乳赤褐色	
56-9	T 5 - 7 周溝埋土	馬	ナデ 刺突文	ナデ	+	3 mm以下砂粒	+	
57-10	T 5 - 7 周溝埋土	馬	円孔	+	+	+	+	
11	T 5 - 7 周溝埋土	馬	刺突文	+	+	+	+	
12	T 5 - 7 周溝埋土	馬	+	+	+	+	+	
13	T 5 - 7 周溝埋土	馬	+	+	+	+	+	
14	T 5 - 7 周溝埋土	馬	タテハケ 5 本	+	+	2 mm以下砂粒	+	
15	T 5 - 7 周溝埋土	馬?	ナデ	+	+	+	+	
16	T 5 - 7 周溝埋土	馬	縞刻	+	+	+	+	
17	T 5 - 7 南側堆丘上	人物 ナデ	+	+	+	+		
61-1	田調査	内側	ヨコハケ・タテハケ 5 本	ナデ	中間	+	暗赤褐色	旧 54 号堆?
2	田調査	内側	ヨコハケ 6 本	+	須恵質	3 mm以下砂粒	乳灰白色	口緑突等 旧 51 号堆
3	田調査	内側	不明	+	+	+	乳青灰色	口緑突等 旧 50 号堆
4	田調査	内側	ヨコハケ 12 本	+	土質質	2 mm以下砂粒	乳赤褐色	旧 50 号堆
5	田調査	内側	ヨコハケ 4 ~ 6 本	+	須恵質	3 mm以下砂粒	乳灰白色	不明 (54 - 55 ハニツ?)
6	田調査	内側	ヨコハケ	+	中間	+	暗灰褐色	不明 (2 号トレレンチ A 出土)
7	田調査	内側	ヨコハケ 4 ~ 6 本	+	+	+	+	旧 51 号堆
8	田調査	朝顔	タテハケ 10 本	+	5 mm以下砂粒	暗青灰色	旧 52 号堆	
62-9	田調査	内側	タテハケ 7 本	+	3 mm以下砂粒	+	旧 52 号堆?	
10	田調査	内側	タテハケ 9 本	+	2 mm以下砂粒	+	旧 52 号堆?	
11	田調査	内側	タテハケ 7 本	+	+	+	+	不明 (A39 ~ A40)
12	田調査	朝顔	タテハケ 5 本	+	3 mm以下砂粒	乳灰白色	旧 51 号堆	
13	田調査	内側	タテハケ 5 本	+	土質質	+	淡赤褐色	旧 52 号堆
14	田調査	朝顔	タテハケ 7 本	ヨコハケ 6 本	中間	+	暗青灰色	旧 52 号堆?
63-15	田調査	盾	縞刻 円孔	ナデ	土質質	+	淡赤褐色	石見型 旧 51 号堆
64-16	田調査	盾	縞刻 円孔	+	+	+	暗赤褐色	石見型 不明
17	田調査	盾	縞刻 円孔	+	+	+	+	石見型 不明 (A34)
18	田調査	盾	縞刻	+	+	+	乳赤褐色	石見型 旧 52 号堆
19	田調査	盾	縞刻 方形孔	+	+	+	+	石見型 旧 52 号堆
20	田調査	盾	縞刻	+	+	+	+	石見型 旧 52 号堆
21	田調査	盾	縞刻 方形孔	+	+	2 mm以下砂粒	+	石見型 不明 (HUトレンド)
22	田調査	盾	縞刻 方形孔	+	+	3 mm以下砂粒	+	石見型 旧 51 号堆
23	田調査	盾	縞刻 方形孔	+	+	+	暗赤褐色	石見型 不明 (A16 区)
24	田調査	盾	縞刻 方形孔	+	+	+	乳灰褐色	石見型 旧 51 ~ 52 号堆
25	田調査	盾	縞刻 方形孔	+	+	2 mm以下砂粒	乳赤褐色	石見型 旧 52 号堆
26	田調査	盾	縞刻 円孔	+	+	+	暗赤褐色	石見型 不明 (HU45 号堆カク大区 A20)
65-27	田調査	人物	ナデ 円孔	+	+	3 mm以下砂粒	淡赤褐色	石見型 旧 50 ~ 52 号堆
28	田調査	人物	ナデ	+	+	+	+	
66-29	田調査	盾	ナデ 縞刻	+	2 mm以下砂粒	暗赤褐色	旧 50 ~ 52 号堆	
30	田調査	盾	+	+	3 mm以下砂粒	乳赤褐色	+	
31	田調査	盾	+	+	2 mm以下砂粒	淡赤褐色	旧 52 号堆	
32	田調査	盾	+	+	3 mm以下砂粒	+	+	
33	田調査	盾	+	+	+	暗赤褐色	+	
67-34	田調査	馬	ナデ	+	5 mm以下砂粒	乳赤褐色	旧 52 号堆?	
35	田調査	馬	+	+	+	+	旧 50 号堆	
36	田調査	馬	+	+	+	+	旧 52 号堆	
37	田調査	馬	+	+	+	+	旧 50 号堆	
38	田調査	家	+	+	+	+	淡赤褐色	旧 52 号堆
68-39	田調査	家	ナデ 縞刻	+	+	+	淡赤褐色	+

40	田調査	家?	×	×	×	淡赤褐色	×
41	田調査	家 ナデ	×	×	3 mm以下砂粒	乳赤褐色	田 50・52 号埴
42	田調査	形象 タテハケ 8本	×	×	5 mm以下砂粒	淡赤褐色	形象の基部 田 51 号埴
43	田調査	形象 ナデ	×	須惠質	3 mm以下砂粒	暗灰褐色	形象の基部 田 52 号埴
44	田調査	形象 ナ	×	土質質	3 mm以下砂粒	暗赤褐色	形象の基部 田 50 号埴
45	田調査	形象 ナ	×	須	2 mm以下砂粒	乳赤褐色	形象の基部 田 52 号埴
69-46	3 号埴周溝	円筒	ヨコハケ・タテハケ 4本	ハケ 4本	×	×	赤褐色 倒木により出土

土器観察表

番号	出土場所	種別	器形	口径 (cm)	脚部 (底部) (径)(cm)	器高 (cm)	調整	色調	他の特徴
11-3	T 1-9サブトレ 北側底土中	須恵器	环身	13.3		4.5	外:回転ヘラケズり、ナデ 内:ナデ	外:鷺灰褐色 内:反褐色	ヘラ削りの回転方向時計回り。
4	T 1-7周溝埋土	須恵器	裏		※ 5.7		外:平行タタキ 内:同心円当て具痕	白灰色	
5	T 1-7周溝埋土	須恵器	裏			14.8	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕	白灰色	
23-1	T 2-2南北ボーナル	須恵器	裏	24.6		※ 4.7	外:ナデ 内:ナデ	外:淡灰色 内:淡灰色	
2	T 2-2古墳表土	須恵器	裏			※ 6.2	外:平行タタキ、ナデ 内:同心円当て具痕、ナデ	外:淡灰色 内:淡灰色	
3	T 2-2南北ボーナル	須恵器	裏			※ 8.6	外:格子目タタキ、ナデ 内:同心円当て具痕、ナデ	外:淡灰色 内:淡灰色	
4	T 2-2弧張区	須恵器	裏			※ 7.5	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕	外:淡灰色 内:淡灰色	
5	T 2-2弧張区	須恵器	裏			10.3	外:格子目タタキ 内:同心円当て具痕	外:淡灰色 内:反灰色	
6	T 2-2古墳表土	須恵器	裏			※ 8.0	外:格子目タタキ 内:同心円当て具痕	外:淡灰色 内:淡灰色	
7	T 2-3周溝埋土	須恵器	环蓋	12.0		※ 3.8	外:回転ヘラ削り、ナデ 内:ナデ	外:淡茶灰褐色 内:淡灰色	ヘラ削りの回転方向不明。
8	T 2-3周溝内底 西側	須恵器	広口壺?			※ 6.2	外:ナデ 内:ナデ	外:淡灰色 内:淡茶灰褐色	
9	T 2-3西端	須恵器	裏			※ 4.2	外:ナデ 内:ナデ	外:淡褐色 内:淡灰色	外面に凹線、斜線文、波状文、 里面に自然釉付着。
10	T 2-3周溝内底 西側	須恵器	裏			※ 3.0	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕、ナデ	外:淡灰色 内:反灰色	
11	T 2-3西端	須恵器	器台			※ 17.0	外:ナデ、カキ目 内:ナデ	灰褐色	外面上に凹線、斜線文、三角形透孔。
12	T 2-4周溝	須恵器	裏			※ 9.7	外:平行タタキ 内:同心円当て具痕	外:淡青灰色 内:淡灰色	
24-13	T 2-8周溝	須恵器	裏	16.8		※ 5.6	外:ナデ、平行タタキ 内:ナデ、同心円当て具痕	外:淡青灰色 内:淡灰色	
14	T 2-8周溝	須恵器	短頭壺	17.6		※ 7.0	外:ナデ、平行タタキ 内:ナデ、同心円当て具痕	外:淡青灰色 内:淡灰色	外面に自然釉付着。
15	T 2-8周溝	須恵器	器台			※ 5.1	外:ナデ 内:ナデ	外:淡灰褐色 内:淡灰色	外面上に凹線、波状文。里面に自然釉付着。
16	T 2-8周溝内	須恵器	高环形器台	35.6	30.1	50.8	外:(环部)タタキ、ナデ (脚部) 内:(环部)ナデ 外:(环部)同心円当て具痕、ナデ (脚部)ナデ	灰褐色、赤灰褐色	(环部):外面上に凹線、波状文。 (脚部):外面に凹線、波状文、 横攝列点文、三角形透孔6 段4方向(1段目、2段目 は6方向)。接合部に突毫、 刻目文。
17	T 2-8北くひれ 部	須恵器	器台			※ 17.0	外:ナデ、カキ目 内:ナデ	灰褐色	外面上に凹線、斜線文、三角形透孔。
25-18	T 2-11周溝	弥生土器	裏	20.2		※ 3.9	外:ナデ 内:ナデ、ヘラ削り	外:淡赤褐色 内:淡赤褐色、淡黃褐色	
19	T 2-11	須恵器	裏			※ 8.0	外:格子目タタキ 内:同心円当て具痕	白灰色	
20	T 2-11周溝	須恵器	器台脚部			※ 8.8	外:ナデ 内:ナデ	淡灰色	外面上に凹線、斜線文、透孔。
21	T 2-14	弥生土器	裏	13.8		※ 4.7	外:ナデ 内:ナデ、ヘラ削り	淡黄褐色	
22	T 2-14	弥生土器	裏	17.3		※ 5.0	外:ナデ、タテハケ 内:ナデ、ヘラ削り	外:黄褐色 内:淡褐色	口縁部外面に保付着。
23	T 2-14	弥生土器	底部			※ 1.5	外:ナデ 内:ナデ	暗赤褐色	外面上・内面とも丹塗り。
24	T 2-14	弥生土器	高坏			※ 5.2	外:ナデ 内:ナデ	淡黄褐色	
25	T 2-14	須恵器	裏	23.0		※ 12.5	外:ナデ、平行タタキ 内:ナデ、同心円当て具痕	绿黄褐色、黑青灰褐色	里面に自然釉付着。
38-1	T 3-1 P 1	弥生土器	高环脚部			※ 3.5	外:不明 内:ナデ	淡黄褐色	
2	T 3-2埋葬施設	土器類	裏	12.0		14.0	外:ナゲ、ナデ 内:ナデ	黄褐色	
3	T 3-2埋葬施設	須恵器	环蓋	14.8		4.9	外:回転ヘラ削り、ナデ 内:ナデ	白灰色	宋刻。回転方向時計回り。
4	T 3-2埋葬施設	須恵器	环身	13.2		4.5	外:回転ヘラ削り、ナデ 内:ナデ	淡灰色	回転方向時計回り。
5	T 3-2東周溝	須恵器	広口壺			※ 1.7	外:ナデ 内:ナデ	灰色	
6	T 3-2東周溝	須恵器	裏			※ 7.5	外:平行タタキ 内:ナデ	外:反褐色 内:反褐色	
7	T 3-2東周溝	須恵器	裏			※ 13.0	外:平行タタキ、櫛状工具によるナデ 内:同心円当て具痕	青灰色	
8	T 3-2東周溝	須恵器	裏			※ 7.8	外:平行タタキ、ナデ 内:同心円当て具痕、ナデ	外:淡灰色 内:淡灰色	

9	T 3-1	須惠器	甕	47.6		102.0	外：ナデ、平行タタキ 内：ナデ、同心円当て具痕、ハケ	黒灰色 内：淡青灰色	
39-10	T 3-4 北周溝	須惠器	甕		④ 4.0	外：ナデ 内：ナデ	淡黄灰色	外面上に実線、波状文。	
11	T 3-4 北周溝	須惠器	器台环部	28.5	⑧ 8.5	外：ナデ 内：ナデ	淡灰色	外面上に凹線、斜縞文。	
12	T 3-4 南周溝	須惠器	提瓶	高大幅 20.3	22.0	外：前面カギメ、背面ナデ 内：ナデ	黒灰色、綠灰色 内：淡色	背部外面上に自然粒付着。 1967年出土分と接合。	
13	T 3-4 南周溝	須惠器	広口壺	13.0	12.7	外：平行タタキ 内：同心円当て具痕、ナデ	黒灰色 内：淡色	外面上に自然粒付着。 1967年出土分と接合。	
14	T 3-4 南周溝	須惠器	甕	19.4	31.3	外：平行タタキ、カギメ、ナデ 内：同心円当て具痕、ナデ	黒灰色 内：淡色	外面上実線1条。	
40-15	T 3-6 北側上層 〔前方後円墳上層〕	須惠器	甕		⑧ 8.9	外：平行タタキ 内：同心円当て具痕、ナデ	黒灰色 内：淡色	外：深灰黑色 内：淡褐色	
16	T 3-6 北側上層 〔前方後円墳上層〕	須惠器	器台脚部		③ 3.0	外：ナデ 内：ナデ	白灰褐色	外面上に実線、波状文。	
17	T 3-7 周溝	須惠器	环身	9.0	⑧ 3.8	外：回転ヘラ削り、ナデ 内：ナデ	淡灰色	回転方向不明。	
18	T 3-7 周溝	須惠器	甕		10.3	外：ナデ、カギメ 内：ナデ	黒灰色 内：淡色	体部中央穿孔。肩部上面に自然粒付着。	
19	T 3-7 周溝	須惠器	筒形器台 脚部		19.5	外：ナデ 内：ナデ	淡灰色	筒部外面上に自然粒付着。 筒部外側に凹線2条。波状文、 前方に凹線、斜縞文。 筒部上面に凹線、斜縞文。 波状文、三角形透孔4方向	
20	T 3-7 周溝	須惠器	甕	19.4	45.5	外：平行タタキ、ナデ、カギ 内：同心円当て具痕、ナデ	黒灰色 内：淡色	肩部外面上に自然粒付着。	
21	T 3-7 周溝	須惠器	甕	39.0	84.3	外：平行タタキ、ナデ 内：同心円当て具痕、ナデ	黒灰色、淡茶褐色 内：淡色	筒部外面上に凹線、波状文。	
22	T 3-7 周溝	須惠器	甕	34.2	69.5	外：格子手タタキ、ナデ 内：同心円当て具痕、ナデ	黒灰色、灰色 内：淡色	筒部外面上に凹線、波状文。 筒部外面上に自然粒付着。	
23	T 3-7 周溝	須惠器	甕	40.6	27.7	外：平行タタキ、ナデ 内：同心円当て具痕、ナデ	黒灰色 内：淡色	筒部外面上に波状文、凹線。	
41-24	T 3-11 周溝	須惠器	环蓋		⑧ 3.8	外：回転ヘラ削り、ナデ 内：ナデ	淡灰色 内：淡色	外：黒灰色 内：淡色	内面上に自然粒付着。頭部外 面上にヘラ記号の一部。
25	T 3-11 周溝	須惠器	広口壺		④ 4.0	外：ナデ 内：ナデ	黒灰色 内：淡色		
26	T 3-11 周溝	須惠器	甕	22.6	⑤ 5.5	外：ナデ 内：ナデ	暗青灰色		
27	T 3-11 周溝	須惠器	甕		③ 3.8	外：ナデ 内：ナデ	黒灰色 内：淡色	筒部外面上に凹線、内面上に自 然粒付着。	
28	T 3-11 周溝	須惠器	器台		⑦ 7.0	外：ナデ 内：ナデ	黒灰色 内：淡色	外面上に凹線、斜縞文。長方 形透孔。	
29	T 3-12 上層	須惠器	器台	20.0	③ 3.9	外：ナデ 内：ナデ	黒灰色 内：淡色	外面上に実線、波状文。	
30	T 3-13 上層	須惠器	环蓋	11.6	④ 3.9	外：回転ヘラ削り、ナデ 内：ナデ	暗灰色		
49-1	T 4-3 S H 1	土器類	壺		4.0	外：ナデ 内：ナデ	赤褐色	筒部附近に指捺痕。	
2	T 4-3 S H 1	土器類	小型鉢	7.4	6.4	外：ナデ 内：ナデ	淡褐色		
3	T 4-3 S H 1	土器類	甕	15.0	22.5	外：ナデ 内：ナデ	淡褐色 内：暗灰褐色		
4	T 4-3 S H 1	土器類	甕	16.0	⑤ 5.2	外：ナデ 内：ナデ	黄褐色		
5	T 4-3 S H 1	土器類	高杯		11.2	外：ハケ、ナデ 内：ナデ	淡黄褐色		
6	T 4-6 2層	土器類	瓶		⑥ 6.3	外：ナデ 内：ナデ	暗青灰色		
58-1	T 5-1 土塙内	弥生土器	壺		8.3	外：ハケ、ヘラミガキ 内：ハケ、ナデ	茶灰褐色	把手部分。	
2	T 5-2 球葬施設	土器類	甕	11.2	12.0	外：ハケ、タテハケ 内：ハケ、ヘラクズリ	淡黄褐色 内：淡褐色	口縁の一部あり。底張部外 面上に格子目、円形浮文、 縦隔壁上面に波状文。	
3	T 5-2 球葬施設	土器類	甕	14.5	15.2	外：ナデ、ハケ 内：ナデ	淡黄褐色	底張著しい。	
4	T 5-2 球葬施設	土器類	环蓋	12.0	4.3	外：回転ヘラ削り、ナデ 内：ナデ	外：白灰色 内：淡色	ヘラ削り回転方向反時計回 り。	
5	T 5-2 球葬施設	土器類	环身	10.4	4.8	外：回転ヘラ削り、ナデ 内：ナデ	暗青灰色	ヘラ削り回転方向反時計回 り。	
6	T 5-2 球葬施設	土器類	短頸甕	8.2	5.6	外：回転ヘラ削り、ナデ 内：ナデ	外：淡褐色 内：淡黄褐色		
7	T 5-2 球葬施設	須惠器	広口壺	15.0	18.9	外：ナデ、平行タタキ、格子 目 内：同心円当て具痕、ナデ	灰褐色		
59-8	T 5-6 貝土	須惠器	环蓋		④ 3.0	外：回転ヘラ削り、ナデ 内：ナデ	淡青灰色		
9	T 5-6 貝土	須惠器	环蓋		④ 2.2	外：ナデ 内：ナデ	淡灰色		
10	T 5-6 貝土	須惠器	环身		④ 3.8	外：ナデ 内：ナデ			
11	T 5-6 貝土	須惠器	甕		④ 6.0	外：ナデ 内：ナデ	外：暗緑灰色 内：綠灰色	外面上に凹線、波状文。外 内面上に自然粒付着。	

12	T 5 - 7 南側縦 重積層	土器	高杯		※ 5.0	外: ナデ 内: ナデ	淡黄褐色		
13	T 5 - 7 北側上層	須恵器	蓋	13.0	3.5	外: 回転ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	淡灰褐色 内: 淡灰色	ヘラ削り回転方向時計回り。	
14	T 5 - 7 南満内	須恵器	甕	24.0	8.0	外: ナデ 内: ナデ	黒褐色 内: 淡灰色	外面上斜線文、凹線。内面一部に自然釉付着。	
15	T 5 - 7 南満内	須恵器	蓋形 器台		※ 5.0	外: ナデ 内: ナデ	黒褐色 内: 淡綠灰色	外面上波状文、沈線。内面に自然釉付着。	
16	T 5 - 7 中央下層	須恵器	皮袋形 瓶?		※ 5.0	外: ナデ 内: ナデ	灰色	底部に竹管文。	
17	T 5 - 7 北豊偏	須恵器	子持器台 (袋詰部)		※ 6.2	外: ナデ、ヘラ削り 内: ナデ	灰 内: 白灰色	口縁部外面に沈線。	
18	T 5 - 7 南満内	須恵器	器台		※ 10.0	外: カタ目 内: ナデ	黒褐色 内: 淡灰色	外面上凹線、波状文。三角形透孔。	
19	T 5 - 8 サブトレ 北	須恵器	甕	9.7	※ 3.5	外: ナデ 内: ナデ	灰色		
20	T 5 - 8 サブトレ 中央下層	須恵器	甕?		※ 3.9	外: ナデ 内: ナデ	黒褐色 内: 淡黃灰色	外面上に沈線、波状文。	
21	T 5 - 8 サブトレ 中央下層	須恵器	甕		※ 6.0	外: ナデ 内: ナデ	黒褐色 内: 淡綠灰色	外面上に波状文。	
22	T 5 - 9 豊土	弥生土 器	壺	12.8	※ 6.0	外: ナキ 内: ナデ	淡茶褐色	外面上に沈線、波状文、直線文。	
23	T 5 - 9 豊土	弥生土 器	甕		※ 2.5	外: ナデ 内: ナデ	淡黃褐色		
24	T 5 - 9 P 1	弥生土 器	甕	17.0	※ 3.7	外: ナデ 内: ナデ	黃褐色		
70-1	旧調査	須恵器	蓋	17.0	5.5	外: 回転ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	淡灰色	天井部の2/3程度ヘラ削り、時計回り。	
2	旧調査	須恵器	蓋	15.3	4.5	外: 回転ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	淡青灰色 内: 淡灰色	天井部の2/3以上ヘラ削り、反時計回り。	
3	旧調査、旧51号 (58号)	須恵器	舟身	10.0	4.4	外: 回転ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	淡青灰色		
4	旧調査	須恵器	舟身	11.4	4.0	外: 回転ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	灰色	底面部の2/3以上ヘラ削り、時計回り。	
5	旧調査	須恵器	有蓋高坪	12.8	※ 5.1	外: 回転ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	青灰色	外部外面に波状文。	
6	旧調査	須恵器	無蓋高坪		※ 6.0	外: 回転ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	黒褐色	脚部3方向に長方形の透孔。	
7	旧調査	須恵器	無蓋高坪	14.0	9.0	※ 6.0	外: 回転ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	灰褐色	脚部3方向に長方形の透孔。
8	旧調査、旧52号 (59号)	須恵器	無蓋高坪		※ 9.5	外: 回転ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	淡灰褐色	脚部3方向に長方形の透孔。	
9	旧調査	須恵器	無蓋高坪		11.0	※ 6.0	外: 平行ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	灰褐色	外部外面に沈線、波状文、脚部外段、3方向に真方形の透孔。
10	旧調査	須恵器	甕	15.0	17.0	※ 6.0	外: 平行ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	暗灰色	体部外面に凹線、横擇列点文。体部中央突起孔。
11	旧調査、旧52号 (59号)	須恵器	広口壺		15.7	外: 平行タタキ、カキ目、ナ 内: ナデ	外: 黑褐色 内: 淡灰色		
12	旧調査	須恵器	広口壺	12.4	15.9	外: 回転ヘラ削り、ナデ 内: ナデ	黒褐色、灰色 内: 黑褐色		
13	旧調査	須恵器	広口壺		11.0	※ 6.0	外: 平行タタキ、ナデ 内: ナデ	緑茶褐色	外面上に自然釉が付着。
14	旧調査	須恵器	広口壺	10.8	14.7	外: 平行タタキ、ナデ 内: ナデ	淡綠灰色	外面上に自然釉が付着。頭部内面に裏部内部の異物が付着。	
15	旧調査	須恵器	広口壺		12.3	※ 6.0	外: 平行タタキ、カキ目 内: 同心円当て具痕、ナデ	外: 青褐色、白灰色 内: 淡灰色	体部最大径付近の内面のみ当て具痕を消し。
16	旧調査	須恵器	広口壺		17.0	※ 6.0	外: 平行タタキ 内: 同心円当て具痕	淡黃反褐色	外面上の一部に自然釉が付着。底部内面に粘土質の接合痕。
17	旧調査	須恵器	広口壺		15.1	※ 6.0	外: 平行タタキ、カキ目 内: 同心円当て具痕、ナデ	淡黃反褐色	
71-18	旧調査	須恵器	甕	41.0	13.6	※ 6.0	外: ナデ 内: ナデ	外: 青褐色 内: 黑褐色	外面上実線、波状文2段。
18	旧調査、旧50号 (57号)	須恵器	甕	14.8	※ 6.0	外: 平行タタキ、ナデ 内: ナデ、同心円当て具痕	緑茶褐色	外面上に自然釉が付着。	
20	旧調査	須恵器	甕	26.8	※ 5.0	外: ナデ 内: ナデ	黑褐色、暗灰色	外面上に自然釉が付着。	
21	旧調査	須恵器	甕	18.0	11.0	※ 6.0	外: 平行タタキ、ナデ 内: 同心円当て具痕、ナデ	淡黃反褐色	
22	旧調査	須恵器	甕		13.6	※ 6.0	外: 平行タタキ、ナデ 内: 同心円当て具痕、ナデ	外: 黑褐色、黄灰褐色 内: 淡灰色	外面上の一部に自然釉が付着。
23	旧調査	須恵器	甕	25.0	10.5	※ 6.0	外: ハケ、平行タタキ、ナデ 内: 同心円当て具痕、ナデ	淡灰褐色 内: 淡灰色	体部外面及び内面の一部に自然釉が付着。
24	旧調査	須恵器	甕	20.4	11.0	※ 6.0	外: 平行タタキ、ナデ 内: 同心円当て具痕、ナデ	淡綠褐色 内: 淡灰色	体部外面に自然釉が付着。
72-25	旧調査	須恵器	甕	19.4	37.0	※ 6.0	外: 平行タタキ、カキ目、ナ 内: ナデ、同心円当て具痕、ナデ	外: 緑褐色 内: 綠褐色	外面上に自然釉が付着。
26	旧調査	須恵器	甕	23.2	51.0	外: ナデ、平行タタキ 内: 同心円当て具痕、ナデ	外: 青褐色、白灰褐色、綠褐色 内: 白灰褐色、綠褐色	口縁部外面に凹線文。口縁部内面。体部外面上半部に自然釉が付着。	

73-27	旧調査	須恵器	裏	25.2	外: 47.0 内: 44.5	外: 平行タタキ、カキメ、ナデ 内: 同心円タタキ、ナデ	灰色	口縁端部外面にナデによる段。
28	旧調査	須恵器	裏	23	-	外: 44.5	灰褐色	口縁端部に長いナデ。
74-29	旧調査、旧 51 号 (58 号)	須恵器	台付長頸壺	30.4	24.0	外: キ目 内: ナデ	外: 緑色 内: 淡黄褐色	(香部) 四線文、波状文。 (台部) 波状文、斜方波状文、斜方透孔 1 段、台形透孔 1 段、 三角形透孔 3 段、5 方角、壺部との接合部に突起、刮目文。
30	旧調査、旧 51 号 (58 号)	須恵器	台付長頸壺	18.8	36.5	外: キ目 内: ナデ	外: ナデ、カキ目 内: ナデ	外: 緑褐色 内: 淡黄褐色
31	旧調査	須恵器	器台		15.9	外: キ目 内: ナデ	外: ナデ 内: ナデ	(香部) 四線文、波状文。 (台部) 波状文、斜方波状文、斜方透孔 1 段、台形透孔 1 段。 (脚部) 四線文、横括引点文、 長方形透孔 5 段 4 方向。 (脚部) 四線文、横括引点文、 波状文、三角形透孔 1 段目 4 方向、2~3 段目 6 方向。
32	旧調査	須恵器	筒形器台		23.0	外: 39.6 内: ナデ	外: ナデ 内: ナデ	外: 緑褐色 内: 淡黄褐色
33	旧調査、旧 50 号 (57 号)	須恵器	器台		23.6	外: 30.8 内: ナデ	外: ナデ、カキ目 内: ナデ	暗青灰色
75-34	旧調査	須恵器	提瓶	最大幅 19.0	19.7	外: ナデ		外面上に四線文、波状文、奥方方形透孔 3 段 4 方向。最下段三角形透孔 4 方向。
35	旧調査、旧 50 号 (57 号)	須恵器	横瓶	10.0	著大幅 34.0	外: 26.0 内: 同心円当で具環、ナデ	外: 緑褐色、淡灰褐色 内: 淡灰色	外面上に焼成時に使用的 固定用突起が残置、口縁部 と全体の接合部に全体の開 閉部の接着痕がある。
36	旧調査	須恵器	壺		5.6	外: 11.5 内: ナデ	外: ナデ 内: ナデ	外: 淡灰色、暗灰色 内: 淡灰色
37	旧調査	土器	裏	19.2	34.4	外: ハケ 内: ヘラ削り	橙茶褐色	ハラの原体幅 3cm、10 本。
38	旧調査	土器	裏	16.0	26.4	外: ハケ、ナデ 内: ヘラ削り	橙褐色	サヌカイト
39	旧調査	土器	裏?		13.5	外: ハケ 内: ヘラ削り、ナデ	淡褐色	サヌカイト

石器観察表

番号	出土場所	種別	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	その他の特徴
49-7	T 4-3 SH1	砾石	9.5	3.5	3.0	177.5	
60-1	T 5-2 黄土	椎先形尖頭器	1.6, 9	4.8	1.2		サヌカイト
2	T 5-2 黄土	椎先形尖頭器	1.1, 8	4.4	1.3		サヌカイト
3	旧調査、旧 51 号 (58 号) 南くびれ	ナイフ形石器	3.9	1.9	0.8		サヌカイト
4	旧調査、旧 51 号 (58 号) 南くびれ	縦長削片	6.6	4.5	1.8		軟質頁岩

鉄器観察表

番号	出土場所	種別	全長	身部長	頭部長	その他の特徴
49-8	T 4-B 横乱土中	鉄頭	約 3.9	4.3	約 0.5	
9	T 4-B 横乱土中	鉄頭	約 3.7	-	-	
10	T 4-2 稲作土中	鉄刀	約 5.2	-	-	茎端部から 4.5 cm のところに直径 0.3 cm の目釘孔。

図 版



日上歟山古墳群（東丘陵）遠景
(南西から)



日上歟山古墳群（東丘陵）遠景
(西から)



日上歟山古墳群（西丘陵）遠景
(北から)



T 1-1 全景（北西から）



T 1-2・3 全景（北から）



T 1-2 全景（北から）



T 1-3 全景（北から）



T 1-2・3
64号墳周溝検出状況（北から）



同上（西から）



64号墳周溝検出状況（東から）



T 1-3
64号墳周溝断面西壁面（東から）



T 1-4 全景（北西から）



T 1-5 全景 (南西から)



T 1-6 全景 (東から)



同上 (西から)



T 1—7 全景（西から）



同上（北西から）



同上（北東から）



T 1-7 周溝断面（北から）



T 1-8 全景（東から）



T 1-9 全景（北から）



T 1-9
焼土面断ち割り状況（南から）



箱式石棺1 調査前（北西から）



同・蓋石棟出状況（南から）



同・アゼ取り外し後（南西から）



同・全景（北西から）



同・蓋石取り外し後（北東から）



同・北東部枕石検出状況（南西から）



同・南西部検出状況（北から）



箱式石棺2調査前（西から）



同・検出状況（南東から）



同・アゼ取り外し後（北西から）



同上（南東から）